キリスト
への道
エレン・G・ホワイト

New Covenant Publications International Ltd. Japanese

版権©2020. 国際新しい契約の出版物。

無断で複写転載することを禁じます。本書のいかなる部分も弊社の許諾なく検索システムへ保存したり、 電子データ、 紙媒体、または録音などの方法で複写・ 転送することを禁じます。

この文書は、国際著作権法によって保護されています。この文書のいかなる部分も、いかなる形式でも複製、配布、翻訳、または送信することはできません。 または、電子的または機械的、コピー、記録、または保存を含む任意の手段 あらゆる情報の保存および検索システム。

式や手段によって。ISBN：359-2-85933-609-1

データカタログ

編集とデザイン：国際新しい契約の出版物。

イギリスで印刷。
初版 2020 年 5 月 26 日

New Covenant Publications International Ltd.,
Kemp House, 160 City Road, London, EC1V 2NX

ウェブサイトをご覧ください：www.newcovenant.co.uk

イエスは取税人たちの食卓に主賓としておつきになり、同情心と社交的な親切とによって、ご自分が人間性の尊厳を認めておられることをお示しになった。そこで人々は、イエスの信頼に値する者になりたいと心から願った。彼らのかわいた心に、イエスのみことばは、いのちを与える祝福の力となってのぞんだ。社会からのけ者にされていたこの人たちに、新しい衝動がめざめ、新しい生活の可能性が開かれた。 DA 805.8

イエスは、真理を求める心と理解力とを破壊する偽りの教えの力を指摘された。「まただれも、古い酒を飲んでから、新しいのをほしがりはしない。『古いのが良い』と考えているからである」（ルカ5：39）。父祖たちと預言者たちとを通して世に与えられてきたすべての真理は、キリストのみことばのうちに新しい美しさを放って輝いた。しかし律法学者たちとパリサイ人たちは、とうとい新しい酒を望まなかった。古い言い伝え、慣例、習慣を空にしてしまうまでは、彼らは、頭や心にキリストの教えを入れる余地がなかった。彼らはいのちのない形式に執着し、生きた真理と神の力から離れた。 DA 809.2

New Covenant Publications

International Ltd.

改革ブック、変換された心は

New Covenant Publications International Ltd.,
Kemp House, 160 City Road, London, EC1V 2NX

Email: newcovenantpublicationsintl@gmail.com

このページは意図的に空白になっています。

謝辞

この本を天の神にささげる

序文

新しい契約出版物国際は、天と地を結合し、愛の律法の永続性を強化する神の計画を読者に再接続します. ロゴ、契約の箱は、キリスト イエスと彼の人々と神の律法の中心性との間の親密さを表しています. 新しい契約とはこうだ - の書にあるとおりです "わたしは、わたしのおきてを彼らの心に刻みつける。そのため彼らは、わたしをあがめたいという気持ちになる。こうして、彼らは文字どおりわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。" (エレミヤ書 31:31-33) 確かに、新しい契約は償還を証明し、衰えのない闘争によって生まれ、血によって封印されます.

数え切れないほどの世紀のために、多くは真実を消し去るために計算され、かじり苦悩と不可解な弾圧を耐えてきました. 特に暗黒時代に,この光は非常に四面楚歌と人間の伝統と人気の無知によって隠されていました,世界の住民は知恵を軽蔑し、契約を犯していたの 増殖する悪との妥協の疫病は、多くの人生が不当に犠牲にされ、良心の自由を放棄することを拒否した、放逸な退化と悪魔的な非人道的な惨状を引 それにもかかわらず、失われた知識は、特に改革の時に復活した.

16世紀の改革の時代は、反改革に反映されるように、真実、根本的な変化とその結果としての乱流の瞬間を巻き起こしました. しかし、この巻を通じて、改革者や他の勇敢な開拓者の視点から、この特異な革命の否定できない意義を再発見する. 彼らの説明から、荒廃した戦い、そのような驚異的な抵抗と超自然的な介入の根底にある理由を理解することができます.

私たちのモットー："改革ブック、変換された心は、"重要な時代とその影響で構成される文学の明確なジャンルを、強調する. それはまた個人的な改革、再生および変形の緊急を共鳴させる. 翻訳の代理店によって結合されたグーテンベルク印刷機として、改革信仰の原則を広め、約500年前に、デジタル化されたプレスとオンラインメディア.

キリストへの道

目次

第1章 - 神の愛 5

第2章- キリストの必要.....12

第3章 -悔い改め 18

第4章- 告白 33

第5章- 献身 38

第6章 - 信仰 44

第7章- 弟子としての証拠.....51

第8章- 弟子としての証拠.....60

第9章- 人生と活動 70

第10章- 神についての知識.....77

第11章 - 祈りの特権 84

第12章 - 疑いをいかにすべきか.....96

第13章- 主こある喜び.....105

第1章 - 神の愛

自然と啓示は、神の愛をあかししています。天の父なる神は、生命と知恵と喜びの源です。自然の妙（たえ）に美しいものを見てごらんなさい。また自然が、人間ばかりでなく、あらゆる生物の必要と幸福を驚くほど満たしていることを考えてごらんなさい。輝かしい日の光、地をうるおす雨、また山、丘、海、平原それらはみな神の愛を物語っています、このようにすべての造られたものの必要をお満たしになるのは神です。詩篇の記者は、美しい言葉をもって次のように歌っています。 {SC 1935.1}

「よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。あなたはみ手を開いて、すべての生けるものの願いを飽かせられます」と。 {SC 1935.2} **（詩篇**145：15、16**）** {SC 1935.3}

神ははじめ、人を全く清く幸福なものにお造りになりました。そして、この美しい地球が創造主のみ手で造られた時には、一点の衰えの兆しも呪いの影もありませんでした。愛のおきてである神のおきてを人が犯したために、死と悩みが生じたのです。けれども罪の結果起った苦しみの中にさえ、神の愛はあらわされています。聖書にも、神は入のために土を呪われたとしるされています（創世記3：17**）。いばらとあざみ、つまり、いろいろの困難や試みがこの世の生涯を心配や苦労の多いものにしていますが、これは人のためであって、罪のもたらした破滅と堕落から救い出すためには、ぜひなくてはならない訓練として神がお定めになったのです。世界は堕落したとはいえ、悲惨なことばかりではありません。自然そのものに希望と慰めのおとずれを読むことができます。その証拠に、あざみにも花が咲き、いばらも花でおおわれています。** {SC 1935.4}

神は愛であるということが、どのつぼみにも、またどの草にもしるされています。かわいい小鳥は楽しい歌声で空気を震わせ、美しい色の花はよいかおりをあたりに漂わせ、森の大木は青々と茂り、それぞれにみな神は優しい父親のように私たちを守ってくださること、私たちの幸福を望んでおいでになることを示しています。 {SC 1935.5}

神のみ言葉は神のご性質をあらわしています。神は自ら、ご自身の限りない愛とあわれみについてお語りになりました。モーセが「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」と言った時に、神はそれに答えて、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」（出エジプト33：18、19）と言われました。これが神の栄えです。神はモーセの前を過ぎて、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」（出エジプト34：6、7）、「怒ることおそく、いつくしみ豊かで」（ヨナ4：2）「いつくしみを喜ばれる」（ミカ7：18）ものであると言われます。 {SC 1935.6}

神は天にも地にも、数えきれぬほどの愛のしるしをまき散らして、私たちの心をご自分に結びつけました。自然界のいろいろのもの、または人の心が感じることのできる深い優しい地上の絆によって、神は私たちに神ご自身を示そうとなさいました。しかし、これらは神の愛のただ一部を示すにすぎません。このような証拠が与えられているにもかかわらず、善の敵である悪魔は人の心をくらまし、神を恐ろしいもののように見せかけ、残酷で人を決してゆるさない者、きびしい裁判官か強欲な金貸しのように、厳として動かぬ者のように思わせています。また創造主をつねに人類のあやまちを拾い上げて厳罰に処している者のように思わせています。イ

エスが人類の間にお住みになったのは、この暗いかげを取り除いて神の限りない愛を示すためでした。{SC 1935.7}

神のみ子が天からおいでになったのは、天の父をあらわすためでした。「神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」（ヨハネ1：18）。「父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」（マタイ11：27）。弟子の一人が「わたしたちに父を示してください」とイエスに願った時、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか」（ヨハネ14：8、9）と言われました。{SC 1935.8}

イエスはこの地上でのご自分のみわざについて次のように説明されました。すなわち「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」（ルカ4：18）ると。

これがイエスの使命でした。彼は広くめぐり歩いて良いことをなし、悪魔に苦しめられている者をいやされました。こうしてあらゆる病気をいやしながら、村々をお通りになったので、村中誰一人、病で苦しむ者がいなくなったほどでした。こうしたお働きがイエスの神からつかわされたことのしるしでした。イエスの生涯のあらゆる行為には愛と情とあわれみとが見られ、その心は優しい同情となって人々の上にさしのべられたのです。イエスが人となられたのも、人間の必要に応じることができるためでした。どんなに貧しい者も、どんなに卑しい者も、恐れなくイエスに近づくことができました。また幼い子供でさえ彼にひきつけられ、そのひざに

よじのぼって愛にあふれた物静かなみ顔に見入るのでした。イエスは真実をなんの遠慮もなく語りましたが、そういう時にはいつも愛をもってお語りになりました。また人と交際するにあたっては、いかにも上手に、深い思いやりと細かい注意を払い、荒々しい言葉を用いたり、なんの理由もないのに言葉を鋭くしたり、感じやすい心をなんの必要もないのに傷つけたり、人の弱さを責めたりなさいませんでした。つねに愛をもって真実を語りました。また偽善、不信、不義をお責めになりましたが、そうした鋭い譴責の言葉を語った時にも、そのみ声は涙にふるえていました。 {SC 1936.1}

道であり真理であり生命である自分を拒んだ、愛する町エルサレムのことを考えて、主イエスは泣かれました。人々はイエスを拒んだのですが、イエスは優しく彼らをあわれまれたのです。彼は一生の間、自己を全く捨てて人のために尽くされました。イエスの目にはどの魂もみな尊く映ったのです。彼は神の子の威厳を備えていましたが、へりくだって、神の家族の一人一人をやさしく思いやり、どの人を見ても、この罪に落ちた魂を救うことこそ自分の使命であると思われたのです。 {SC 1936.2}

キリストの生涯はこうした性質のものでしたが、これこそ神のご性質です。キリストのうちにあらわされ、人類の上にあふれ出た天からの愛の流れは、天の父のみ心から出たものです。優しい思いやり深い救い主イエスは「肉において現れ」（Ⅰテモテ3：16）た神でした。 {SC 1936.3}

キリストが地上に生活し、苦しみ、十字架上で死なれたのは私たちをあがなうためでした。彼は私たちが永遠の喜びにあずかることができるように、「悲しみの人」となりました。神は、恵みと真理に満ちたひとり子を、栄光に輝くみ国より罪にそこなわれ死とのろいに暗く閉ざされたこの世にくだされたのです。神は、イエ

スが愛のふところを離れ、天使たちの賛美の声をあとにして、苦しみと恥、無礼、屈辱、憎しみ、はては死をさえ受けることをおゆるしになりました。「彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」（イザヤ53：5）。荒野の、ゲッセマネの園の、または十字架上のイエスをごらんなさい。1点の汚点もない神のみ子が、罪の重荷を負い、また神と共におられた方が罪の結果である神と人との間の恐ろしい離別を経験されたのです。そして「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ27：46）という苦しい叫びがそのくちびるをついて出たのです、罪の重荷、罪の恐ろしさ、神から遮断されることなどが神の子の心を砕いたのでした。 {SC 1936.4}

しかし、この大きな犠牲が払われたために、天の神のみ心に人に対する愛の気持ちをおこさせたのでもなければ、救いたいとの考えを生じさせたのでもありません。いいえ、そうではなく「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛」（ヨハネ3：16）されたのです。神は、その大きななだめのそなえもののゆえに、私たちを愛されたのではなく、私たちを愛するゆえに、なだめのそなえものを与えられたのです。キリストは罪に落ちた世界に神の限りない愛を注がれる仲介者でした。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」（Ⅱコリント5：19）とあります。神はみ子と共にお苦しみになりました。ゲッセマネの苦しみ、カルバリーの死を通し、限りない愛をもたれる神は私たちのあがないの価をお払いになったのです。 {SC 1936.5}

イエスは「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである」（ヨハネ10：17）と言われました。これはつまり、こういう意味です。 {SC 1937.1}

「私の父は、あなたがたをこの上なく愛しておられますから、私があなたがたの救いのために命を捨てたため、以前にもまして私を愛してくださいます。あなたがたの負債と罪を負って生命を捨て、あなたがたの身代わり、保証人となったため、私は父にいっそう愛せられるようになったのです。なぜならば、私の犠牲によって神は義であることができると同時に、私を信じる者をも義とすることができるからです」 {SC 1937.2}

神の子のほかには誰も私たちのあがないを全うすることはできません。というのは神のふところにいた者でなければ神をあらわすことはできないからです。神の愛の高さ、深さを知る者だけがそれをあらわすことができるのです。堕落した人類のためにキリストが払われた限りない犠牲ほど、失われた人類に対する神の愛をあらわすことのできるものはありません。 {SC 1937.3}

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」。神はキリストを、ただ人々の間に生活し、人々の罪を負い、彼らの犠牲となって死ぬためにお与えになったばかりでなく、神はキリストそのものを堕落した人類にお与えになったのです。キリストは人類の利害、また必要を人々と共に味わわれました。神と一つであったキリストは、人々と切っても切れない絆で結ばれ「彼らを兄弟と呼ぶことを恥」（ヘブル2：11）とされません。彼は私たちの犠牲、また助け主、私たちの兄弟です。神の御座の前に人間の姿をもって立ち、永遠に自らあがなわれた人類の一人となった「人の子」です。これはみな罪の淵より、また滅びより人が引き上げられ、神の愛を反映し、清き者となる喜びにあずかるためでした。 {SC 1937.4}

私たちのあがないのために払われた価、私たちのためにそのひとり子に死をさえおゆうしになった天の神の測り知れない犠牲を考えるとき、キリストによって私

たちは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはいられません。霊感に動かされた使徒ヨハネは、滅びゆく人類への天の父の愛の高さ、深さ、広さをながめて、心はただありがたさと敬虔の念でいっぱいになり、その愛の偉大さ、優しさを適当に表現する言葉を見いだすことができないで、「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか」（Ｉヨハネ3：1）と世界に呼びかけています。人はなんと尊い価値をもっていることでしょう。罪を犯して人の子らは悪魔の奴隷となりましたが、キリストのあがないの犠牲を信じることによって、アダムの子らはまた神の子となることができるのです。キリストは人の性情をおとりになって人類を引き上げてくださいました。罪に落ちた人類は、キリストにつながってはじめて「神の子」という、その名にふさわしい尊い者となれるのです。 {SC 1937.5}

このような愛に比べ得るものは何もありません。天の王子となるというのです。なんと尊いみ約束でしょう。これは深いめい想に価する主題です。神を愛さなかった人類へのたぐいもない神の愛です。この愛を考える時心はへりくだり、神のみ旨のままに従うようになります。そして、十字架の光に照らされて、神のご性質を学べば学ぶほど神の恵みとあわれみを知り、神の公平と正義とゆるしとが一つになっていて、放蕩息子を思いやる母親にも勝る限りない優しい愛の、数知れない証拠を認めることができるのです。 {SC 1937.6}

第2章- キリストの必要

初め、人は優れた能力と調和の取れた精神を与えられていました。彼はまた人として完全で神と調和し、思想も純潔で、清い目的をもっていました。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、愛は利己心と変わってしまいました。罪のため人の性質はすっかり弱められて、自分の力では悪の勢力と戦うことができなくなりました。こうして悪魔のとりことなってしまったのですから、もし、神が特別に救ってくださらなかったならば、いつまでもそのままの状態でいたことでしょう。悪魔は、人類を創造なさった神のご計画を妨害し、この世を悲しみと破壊で満たそうと思いました。そして、こうした災いはみな神が人類を創造された結果であると言おうとしたのです。{SC 1938.1}

人は、罪を犯す前には「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」（コロサイ2：3）キリストとの交わりを楽しむことができました。けれども罪を犯して後は、もはや清いことを楽しめなくなり、神のみ前から隠れようとしました。今日でも、新生を経験しない人の状態は同じで、彼らは神と一致していないため神と交わることを喜ばないのです。罪人は神のみ前では楽しむことはできません。彼らは、清い人々との交わりを避けようとします。たとえ天国に入ることが許されても、少しも喜びとはならないでしょう。天国では無我の愛の精神が満ち満ちていて、限りない神の愛をすべての心が反映しているのですが、そうした精神も、罪人の心にはなんの感動も与えないことでしょう。そして、その思想も興味も動機も天国に住む罪なき人々の気持ちとは全く異なっていることでしょう。彼らは天国の美しい音楽と調和しないものとなるのです。天国はあたかも苦しいところのように思われ、光であり喜びの中心である神のみ顔を避けようとすることでしょう。悪人は天国に入れないというのは、何も神が独断的にお定めになったのではありません。それは、

彼ら自らがそうした交わりに不適当な者となってしまったからです。神の栄光は、罪人にとっては焼きつくす火です。罪人は、自分たちをあがなうために死なれたキリストのみ顔を避けて滅ぼされたいと望むようになるのです。{SC 1938.2}

私たちは、自分の力で1度沈んだ罪の淵から逃れることはできません。また、私たちの悪い心を変えることもできないのです。「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができようか、ひとりもない」（ヨブ14：4）、「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」（ローマ8：7）とあります。教育、教養、意志の力、人間の努力などいずれも、それぞれ大切な役割を持ってはいますが、心を新たにする能力は全くないのです。もちろん、私たちの行動にただ外面的な正しさは与えるかも知れませんが、心を変えることもできなければ、生活の源泉を清めることもできないのです。天よりの新しい生命がその人の内部に働かなければ、人は罪より清められることはできません。このカというのはキリストです。キリストの恵みのみが人のカなき魂を生きかえらせて、これを神と清きに導くことができるのです。救い主も「だれでも新しく生まれなければ」と言われました。すなわち、新しい生涯を送るための新しい心、新しい希望、目的、動機などが与えられなければ、「神の国を見ることはできない」（ヨハネ3：3）のです。人は、生まれながらに持っている良いところをのばせばよいという考えは恐ろしい誤りです。聖書には、「生まれながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」（Ｉコリント2：14）、「あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない」（ヨハネ3：7）とあります。また、キリストについては「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」（ヨハネ1：4）

、「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては天下のだれにも与えられていないからである」（使徒行伝4：12）としるされています。{SC 1938.3}

人はただ、神の愛といつくしみ、また、父親のような優しさを悟っただけでは十分でありません。また神のおきてにあらわれた知恵と正義とを認め、おきてがいつまでも変わらない愛の原則の上にたてられていることを認めただけでも十分とはいえません。使徒パウロはこのことをよく知って、「もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる」「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」（ローマ7：16、12）と叫んだのですが、なおつけ加えて「わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである」（ローマ7：14）と言ったのは、言うに言われぬ苦痛と失望があったからです。彼は純潔と正義とを求めてやみませんでしたが、彼自身にはそこまで達する力はありませんでした。そしてついに、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」（ローマ7：24）と叫んだのです。こうした叫びは、どこにおいても、どんな時代にも、罪の重荷に悩む人々の心から等しくほとばしり出たものです。こうした人々への答えは「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ1：29）というみ言葉よりほかにはありません。{SC 1939.1}

神の聖霊は、罪の重荷から逃れたいと望んでいる魂にいくつも例をあげて、この真理をわかりやすく説明しています。ヤコブはエサウを欺いて罪を犯し、父の家を逃れた時、いい知れぬ罪の重荷でおさえつけられるように感じました。今までの楽しかった生活をあとにして、1人寂しく家を追われていく彼に、何よりもまず気

になったのは犯した罪のために神から切り離され、天より全く見捨てられてしまったのではないかということでした。こうした悲しい心をいだいて、着のみ着のまま土の上に横たわる彼の周囲には、寂しく丘が起伏し空には星が明るくまたたいていました。彼が夢路に入ったかと思うと、不思議な光がまぼろしのうちに目の前に輝き出ました。それは、今自分が眠っている原野から、大きな影のようなはしごが天の門まで通じているかのように見え、その上を神の使いが上ったり下りたりしていました。そして輝く栄光のかなたから、慰めと希望にみちた神のみ声が聞えてきて、彼の心の求めと望みを満たすのは救い主であることを知らされたのです。彼は罪人である自分がもう一度神と交わることができる道を示されて、喜びと感謝に満たされました。ヤコブの夢にあらわれた不思議なはしごは、神と人類の間のただ1人の仲保者イエスを代表したものです。{SC 1939.2}

キリストがナタナエルと語られた時、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」（ヨハネ1：51）と言われたのは、これと同じことを指していたのです。人間は神に背いて自ら神に遠ざかり、ついに地は天より切り離されてしまいました。このだれも渡ることができない深い淵を、再びつないで地と天と結びつけてくださったのはキリストです。キリストは御自らの功績によって罪の結果である深い淵に橋をかけ、奉仕の天使が人との交わりを続けることができるようにしてくださいました。キリストは、罪に沈んだ弱い無力な人間を限りない力の源につないでくださるのです。{SC 1939.3}

人間がいかに進歩を夢み、人類向上のためいかに努力を惜しまないとしても、堕落した人類にとってただ一つの希望である助けの源泉に頼らなければ何の役にもたちません。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は」（ヤコブ1：17）神

より与えられます。神を離れては真にすぐれた品性をもつことはできません。そして神へのただ一つの道はキリストです。キリストは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ14：6）と言われました。{SC 1939.4}

神は、死よりも強い愛をもって、地上の子らに思いをかけておいでになります。神がひとり子をお与えになったということは、全天をそそぎだして、一つの賜物として与えられたということなのです。救い主の生涯、死、その執り成し、天使の奉仕、聖霊の懇願これらいっさいのものを通じて働いておいでになる父なる神と、天の住民たちの絶えざる関心などが、ことごとく人の救いのために力をそえているのです。{SC 1939.5}

私たちのために払われた驚くほどの犠牲を静かにめい想してみましょう。ひとたび失われたものを呼びかえし、父なる神の家に連れもどすためには、天はあらゆる努力を惜しまないことを感謝いたしましょう。これにまさる動機や力ある方法は、他ではどこにも見いだすことはできません。正しい行為に対する大いなる報酬、天上の喜び、天の使との交わり、神のみ子の愛との交わり、また永遠にわたって私たちのあらゆる能力がのばされ、高められていくことなどは、私たちの創造主、あがない主に心から愛の奉仕をさせずにはおかぬ刺激であり、奨励ではないでしょうか。{SC 1940.1}

ところが一方、罪に対する神の審判、必然的な報い、品性の堕落、そして最後の滅亡などがみ言葉にしるされているのは、私たちに悪魔の働きを警告するためです。{SC 1940.2}

私たちは神のあわれみを無視してもいいでしょうか。神は一体これ以上何をなさることがあるでしょうか。驚くばかりの愛をもって私たちを愛された神との正しい関係に立ち帰りましょう。そして与えられた方法を最もよく用いて神のみかたちに変えられ、もう一度天使と交わることを得て、父なる神とみ子とに一致し、その交わりにはいることができるようにしたいものです。 {SC 1940.3}

第3章 -悔い改め

人は、どのようであったら神の前に正しいと言えるでしょうか。罪人は、どうすれば義とされるのでしょうか。私たちは、ただキリストによってのみ神と一致し、清くなることができます。それでは、どうすればキリストのもとに行くことができるでしょうか。ペンテコステの日に群衆が罪を悟って、「わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と叫んだように、今日、多くの人々は同じ質問をしています。ペテロは、「悔い改めなさい」（使徒行伝2：38）と言い、また「自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」（使徒行伝3：19）とも言っています。 {SC 1940.4}

悔い改めとは、罪を悲しむことと罪を離れることを含みます。人は、罪の恐ろしさを知るまでは罪を捨てるものではありません。心の中で全く罪から離れなければ、生活に本当の変化は起こらないのです。 {SC 1940.5}

悔い改めの意味を本当にわかっていない人が多くあります。罪を犯したことを嘆き、外面的には改める人もありますが、それはその悪事のために苦しみにあわねばならぬことを恐れるからです。しかし、これは聖書に教えられた悔い改めではありません。彼らは罪そのものよりは、むしろ罪からくる苦しみを悲しむのです。エサウが家督の権を永久に失ってしまったと気づいた時の悲しみがそうでした。また、バラムは、自分の行く手に剣をぬいた天使が立ちふさがっているのを見て、命が奪われるのではないかと恐れ、自分の罪を認めたのです。けれどもそれは、罪に対する純真な悔い改めではなく、目的を全く変えるのでもなければ悪を嫌悪するのでもありませんでした。イスカリオテのユダは主を裏切ったあとで、「わたしは罪の

ない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」（マタイ27：4）と叫びました。{SC 1940.6}

ユダは、恐るべきさばきと自分の犯した罪のため、自責の念に耐えかねてこういう告白をせずにはいられなかったのですが、それは自分の身にふりかかってくる結果を恐れたためで、傷なき神のみ子を裏切り、イスラエルの聖者を拒んだことを深く心の底から悔いたのではありませんでした。パロも、神の刑罰を受けて苦しんだ時、それ以上の刑罰を逃れるため自分の罪を認めましたが、災いがやむと、また、前のように神にそむいたのです、これらの人々はみな罪の結果を嘆いたのであって、罪そのものを悲しんだのではありませんでした。{SC 1940.7}

けれども人の心が神の聖霊の感化に服従するならば、良心は呼びさまされ、罪人は神の聖なるおきてのいかに深くまた聖なるものであるかを悟り、これこそ天地を治めておいでになる神の政治の基礎であると知るようになるのです。「すべての人を照すまことの光があって、世にきた」（ヨハネ1：9）とある、その光に心の奥底を照らされ、また暗きにかくれた事柄を照し出されて、心も魂も自分は罪ある者であるという思いでいっぱいになります。そして正しく、また人の心を探りたもうエホバの神の前に、罪と汚れのまま立つことを恐れます。こうして神の愛、聖潔の美、純潔の喜びを認め、自分も清められて神との交わりに立ち帰りたいと切望するようになるのです。{SC 1940.8}

ダビデが罪を犯した後にささげた祈りは、罪に対する悲しみをよくあらわしています。彼は真面目に、心の底から悔い改めたのです。自分の罪を弁解しようとするのでもなければ、恐ろしい刑罰を逃れようという気持ちから祈ったのでもありません。ダビデは自分の罪の恐ろしさと魂の汚れを認めて、自分の罪を憎んだのです。彼が祈ったのは、罪のゆるしばかりでなく心が清められることでした。また聖潔

の喜びを切望し、もう一度神とやわらぎ、神との交わりに入りたいと願ったのです。彼の心から次のような言葉があふれ出ました。 {SC 1941.1}

「そのとががゆるされ、 {SC 1941.2}

その罪がおおい消される者はさいわいである。 {SC 1941.3}

主によって不義を負わされず、 {SC 1941.4}

その霊に偽りのない人はさいわいである」 {SC 1941.5}

（詩篇32：1、2**）** {SC 1941.6}

「神よ、あなたのいつくしみによって、 {SC 1941.7}

わたしをあわれみ、 {SC 1941.8}

あなたの豊かなあわれみによって、 {SC 1941.9}

わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。…… {SC 1941.10}

わたしは自分のとがを知っています。 {SC 1941.11}

わたしの罪はいつもわたしの前にあります。…… {SC 1941.12}

ヒソプをもって、わたしを清めてください。 {SC 1941.13}

わたしは清くなるでしょう。 {SC 1941.14}

わたしを洗ってください、 {SC 1941.15}

わたしは雪よりも白くなるでしょう。…… {SC 1941.16}

神よ、わたしのために清い心をつくり、 {SC 1941.17}

わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。 {SC 1941.18}

わたしをみ前から捨てないでください。 {SC 1941.19}

あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。 {SC 1941.20}

あなたの救いの喜びをわたしに返し、 {SC 1941.21}

自由の霊をもって、わたしをささえてください。…… {SC 1941.22}

神よ、わが救いの神よ、 {SC 1941.23}

血を流した罪からわたしを助け出してください。 {SC 1941.24}

わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう」 {SC 1941.25}

（詩篇51：1〜14**）** {SC 1941.26}

このような悔い改めは、自分の力ではとてもできるものではありません。これは天にお上りになって、人類に聖霊の賜物を与えたもうキリストによるほかないのです。 {SC 1941.27}

ところがここで考え違いをして、せっかく、キリストが与えようとしておいでになる助けを受けない人が多いのです。つまり彼らは、まず悔い改めなければキリストに近づけない、悔い改めは罪のゆるしを受ける準備であると思っています。もちろん悔いくずおれた心だけが救い主の必要を感じるのですから、悔い改めが罪のゆるしに先だつのは当然です。それでは、罪人は悔い改めるまではイエスのもとに行かれないのでしょうか。悔い改めが罪人と救い主との間の障害物となってよいものでしょうか。 {SC 1941.28}

聖書は「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ11：28**）というキリストの招待は、罪を悔い改めなければ受けることができない、とは教えていません。罪人が真に悔い改め**

るようになるのは、キリストから出る力によるのです。ペテロはこの点をはっきり述べて「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救い主として、ご自身の右に上げられたのである」（使徒行伝5：31）とイスラエル人に言っています。私たちは、キリストなくしてはゆるしが与えられないのと同じように、キリストの霊が良心を呼びさまさなければ悔い改めることができないのです。 {SC 1941.29}

キリストはすべての正しい動機の根源であって、彼のみが人の心のうちに罪を憎む心を植えつけることができるのです。真理や純潔を求めること、自分の罪深さを認めることなどはみな、キリストの霊が私たちの心に働いている証拠です。 {SC 1942.1}

イエスは「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」（ヨハネ12：32）と言われました。キリストは世の罪のために死なれた救い主として罪人の前に示されなければなりません。カルバリーの十字架にかけられた神の小羊をながめる時にはじめて、説明することのできない贖罪の神秘が私たちの心にも理解され、神の恵み深きことが私たちを悔い改めへと導くのです、キリストは罪人のために死なれ、はかり知れない大きな愛をあらわしてくださいました。罪人がこの愛を知るとき、深い感銘を受けて心はやわらげられ、悔い改めへと導かれるのです。 {SC 1942.2}

もちろん、人は自分がキリストに導かれていることを意識する前に、罪深い行為を恥じて悪い習慣をやめることがあります。けれども、人が正しいことをしたいと切望して改めようと努力する時はいつでも、キリストの力が働いて彼らを引きつけているのです。自分たちは意識してはいないけれども、その力が心のうちに働いて良心を呼びさまし、行為が改められるのです。やがてキリストに導かれて十字架

を見せられ、自分たちの罪が彼を刺し通したことを知る時、おきての何たるかが良心にはっきりと焼きつけられ、悪にみちた生活や心の底深くに根ざした罪が示されます。彼らはキリストの義とは何であるかを幾らかでも理解するようになり、「ああ、なんと罪は恐ろしいものだろう。罪のとりこになった者を救うためにはこのような大きな犠牲が払われなければならなかったのか、私たちが滅びず永遠の生命を受けるためにはこのような大きな愛、恐ろしい苦しみ、また、はずかしめが必要であったのか」と叫ばずにはいられなくなります。{SC 1942.3}

罪人はこの愛を拒み、キリストに引かれることを拒むこともできますが、逆らいさえしなければ自然にイエスに引きよせられるのです。そして救いの計画を知るようになると、自分の罪が神の愛するみ子をこのように苦しめたことを悔いて、十字架のもとにひざまずくのです。{SC 1942.4}

自然界にも働いているこの同じ神のみ心は、人の心に呼びかけ、人が持ち合わせていない何ものかに対する表現しがたい渇望を起させるのです。この世のものではいかにしても彼らの渇望を満たすことはできません。聖霊は、心に真の平安を与えうる唯一のものであるキリストの恵みと、清めの喜びを求めるように訴えています。私たちの救い主は絶えず、見える見えないにかかわらず、さまざまの力を用いて、満足のない罪の快楽を離れ、キリストによって与えられる限りない祝福を求めるよう、私たちの心に働いておいでになります。この世の渇ききった泉のほとりで、飲もうとしても飲むことのできない人々に、み言葉は、「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」（黙示録22：17）と呼びかけています。{SC 1942.5}

あなたがたのうちで、この世の与えるものよりもさらに良いものを心の中で求めておられる方は、その心の願いが魂へ呼びかける神のみ声であることにお気づき

になるでしょう。どうかそのときは、神が悔い改めを与えてくださるように、そして限りない愛にあふれた全く純潔そのものの姿のキリストをお示しくださるように祈っていただきたいのです。救い主は、神のおきての原則、すなわち神と人とを愛するということを、その生涯において完全に実行されたのです。また、慈悲と無我の愛が救い主のいのちでした。ですから私たちが救い主をながめ、救い主の光に照らされるとき、はじめて自らの心の罪深さが見えてくるのです。{SC 1942.6}

私たちもニコデモのように、自分の生活は正しくて道徳的にも間違っていないとうぬぼれ、ふつうの罪人のように神の前にへりくだる必要がないと考えているかも知れませんが、ひとたびキリストの光が心の中にさしこむとき、自分たちがどんなに汚れているかがわかるのです。また何をするにも自分の利益ばかり考え、神に逆らい、日常のあらゆる行動が汚れていたことを悟るのです。そして、私たちの義は汚れた衣のようであって、キリストの血のみが罪の汚れより清め、彼のみ姿にかたどって、私たちの心を新たにすることを知るのです。{SC 1942.7}

神の栄光のただ一筋でも、あるいはキリストの純潔のひらめきでも、人の心に照りこむとき、心の汚れの一つ一つが痛々しいまでに、はっきりと見せられ、人の性質の欠点、欠陥があますところなく示されるのです。それは汚れた欲望、不誠実、汚れたくちびるなどをはっきりと見せるのです。罪人の日には、神の律法を無視した不誠実な行いが、はっきりと見せられ、人の心を探る聖霊に打たれ苦しめられます。そして、キリストの純潔無垢のご人格をながめて、自分を忌みきらうようになります。{SC 1943.1}

かつて預言者ダニエルは、自分に天使がつかわされた時、その天使の栄光をながめて、自らの弱さと不完全さを感じ、気を失ってしまったのです。その驚くべき光景にうたれ、「力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくな

った」（ダニエル10：8）と語りました。このように、ひとたび、感動をうけた心は、我欲を憎み、利己心を忌みきらい、キリストの義によって神の律法、またイエスの品性に調和した心の純潔を求めるのです。{SC 1943.2}

パウロは「律法の義については（外部にあらわれた行為）落ち度のない者である」（ピリピ3：6）と言いましたが、ひとたび、おきての霊的精神が理解されたとき、自分は罪人であると悟ったのです。人がおきてを外的生活にあてはめ、おきてを字義的に解釈すれば、彼は罪を犯していなかったと言えるのです。しかし、その聖なる条文の深い精神を見つめ、神がご覧になるように自らを見つめたとき、心へりくだってみ前に伏し、自らの罪を告白したのです。彼は「わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り、わたしは死んだ」（ローマ7：9、10）と語りました。ひとたび、おきての霊的精神がわかったとき、罪の醜さがそのまま、ありありと見せられ、自尊心は失せ去ったのです。{SC 1943.3}

神は、どの罪もみな同じであるとは思われません。人間と同じようにやはり大小、軽重の区別をされます。けれども、人の目にどんなに小さく見える悪事でも、神の前には、決して小さい罪というものはありません。人の判断はかたよって不完全なものですが、神はすべてをそのあるがままにお量りになります。例えば飲酒家は軽蔑されて、とても天国には行かれないと言われますが、その反面、高慢、我欲、どん欲などは責められず、見過ごしにされがちです。しかし神は、こうした罪を特に嫌われるのです。というのは、これは神のあわれみ深い品性に反し、堕落しない宇宙に満ちている無我の愛の精神に反するからです。何か大きい罪を犯した者は自ら恥じ入り、卑しさを感じ、キリストの恵みの必要を感じますが、高慢な者は何

の必要も感じないため、キリストに対して心を閉じてしまい、キリストが来て、与えようとなさる無限の祝福を受けることができないのです。{SC 1943.4}

「神様、罪人のわたしをおゆるしください」（ルカ18：13）と祈ったあわれな取税人は、自らを大悪人であると認めました。また他の人々も同じように、彼をそう見なしていました。しかし彼は、自分の必要を感じ、罪の重荷と恥をいだいたまま神のみ前に出て、あわれみを請うたのでした。彼の心は聖霊の恵みある働きにより、罪の力から解放されるため開かれていました。一方、高ぶって自己を義としていたパリサイ人の祈りは、聖霊の働きに対して心を閉じていたことがわかります。彼は、神から遠く離れていたので、神の全き神聖さと比べてみて、自分がどれほど汚れているかを感じませんでした。そして彼は必要を感じなかったので、何も受けることができませんでした。{SC 1943.5}

もし、自らが罪深いことに気づいたならば、自分でよくしようなどと思って待ってはなりません。自分はキリストのもとに行くにはふさわしくない、と思っている人が何と多いことでしょう。自分の力で良くなれるとでも思っているのでしょうか。「エチオピヤびとはその皮膚を変えることができようか。ひようはその斑点を変えることができようか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも、善を行うことができる」（エレミヤ13：23）とあります。私たちを助けてくださるのは神のみです。もっと強い確信、もっといい機会、あるいは、もっと清められた性質を持つまで、などと待ってはなりません。私たちは自分の力では何もできないのですから、ありのままでキリストに行くほかないのです。{SC 1943.6}

しかし、神は愛と恵みに富まれるからといって、その恵みを拒む者まで救ってくださると思い、自らを欺いてはなりません。罪がいかに恐るべきものであるかは、十字架の光に照らされてはじめてわかるのです。神はあわれみ深いお方なので罪

人をお捨てにはならないと説く者があれば、そういう人はカルバリーの十字架を見るべきです。というのは、人の救われる方法、つまり人類が汚れた罪の力から逃れ、聖なる者との交わりに立ち帰り、再び霊的生活にあずかる者となるには、キリスト自ら不従順の罪を負い、罪人のかわりにお苦しみになるよりほかに方法がなかったのです。神のみ子の愛と苦難と死はみな、罪がいかに恐ろしいものであるかをあかしし、キリストに心を全く任せるよりほかには、その罪の力より逃れることも、向上した生活への希望もないことを明らかにしています。 {SC 1944.1}

悔い改めない人は、クリスチャンととなえる人々のことを口実にして「私もあの人たちと同じぐらい善良だと思う。あの人々が自分よりも真面目で、慎重に行動しているとは思われない、私と同じように快楽を愛しているし、わがままもする」と言います。こうして彼らは他人の欠点を拾い上げて、自分の義務を行わなくてもいいと言いわけしているのです。しかし、他人の罪や欠点は言いわけにはなりません。なぜならば、主は私たちに間違いの多い人間を模範としてお与えになったのではないからです。私たちの模範として与えられたのは、傷のない神のみ子です。クリスチャンの間違いをかれこれ言う人こそ、より良い生活、より良い模範を示さなければなりません。クリスチャンについて、こうなければならないとそれほど高尚な意見を持っているとするならば、彼らの罪はかえってそれだけ大きくはないでしょうか。なぜならば、彼らは正しいと知りながら実行しようとしないからです。 {SC 1944.2}

延ばさないように気をつけましょう。罪を捨てることを延ばし、イエスによって心を清めていただくことを遅らせてはなりません。この点で幾千という人が誤り、永久に滅びてしまいました。私は今、人生の短いことや、はかないことを言おうというのではありませんが、ここに人の気づかない恐ろしい危険があります。それ

は、聖霊のささやきに従うことを延ばし罪の生活を続けていくという恐ろしい危険です。これは実に恐ろしいことです。たとえどんなに小さくても、罪にふけることは、永遠に失われる危険をおかしているのです。{SC 1944.3}

私たちが打ち勝たないものは、やがて私たちを打ち破り、ついには私たちを滅びにいたらせるのです。{SC 1944.4}

アダムとエバは、禁断の木の実を食べるということは、ほんの小さいことであるから、神が宣告されたような恐ろしい結果とはなりえないと、自ら思い込んでしまいました。しかし、この小さいことが神の変わることのない清いおきてを犯し、人を神から引き離し、この世に死と、言い尽されぬ災いをもたらしたのです。それ以来、いつの代にも、嘆き、悲しみの声が地より上がり、すべての被造物が人間の不従順の結果、うめき苦しんできたのです。天そのものさえ、人間の神への反逆の結果を感じました。カルバリーの十字架は、神のおきてを犯した罪をあがなうため払わなければならなかった驚くべき犠牲の記念碑として立っていま風ですから、罪は小さいものであると考えてはならないのです。{SC 1944.5}

どんな罪の行為でも、また、キリストの恵みをおろそかにし拒んだりするどんな行為でも、その一つ一つが自分にまた返ってきます。そして心はかたくなになり、意志の力は衰え、理解力は麻痺し、ますます聖霊の優しいささやきに従わないようになるばかりでなく、従うことができないようになってきます。{SC 1944.6}

けれども、世の中には、悪い行為を変えようと思えばいつでもできる、また、あわれみの招待を軽んじながら、なお聖霊の声に耳を傾けることはいつでもできると思って、良心の苛責を静めようとしている人々がたくさんいます。彼らは、恵みの霊を侮り悪魔にくみしていても、いよいよ動くに動けない窮地に陥った時には方

向を変えることができると思っています。しかし、それはそうたやすくできるものではありません。一生涯の経験や教育はすっかり人の性格を形づくってしまっているので、その時になって、イエスのみかたちを受けたいと望むことはほとんどないのです。{SC 1944.7}

たとえそれがどんな小さい悪癖、どんな欲望であっても、いつまでも心の中でもてあそんでいれば、終わりには福音のすべての力を無にしてしまいます。魂は罪にふけるごとに、神をきらう心が強くなります。頑固に神を信じようとせず、真理に対して全く冷淡であるという人は、ただ自分のまいた種を収穫しているにすぎません。いにしえの賢人は、罪人は「自分の罪のなわにつながれる」（箴言5：22）と言いましたが、悪をもてあそぶことが恐ろしいということをこれほど適切に忠告しているものはありません。{SC 1945.1}

キリストは、いつでも私たちを罪より解放しようとしておられます。けれども私たちの意志を強いることは決してなさいません。もし、私たちがどこまでも罪を犯し続ける結果、意志は全く悪に傾き、罪より解放されることを望まず、キリストの恵みを受け入れようとしないならば、いったいキリストは何をなさることができましょう。{SC 1945.2}

私たちは彼の愛をどうしても受けようとしないため、自らを滅びに陥れるのです。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」（Ⅱコリント6：2）。「きょう、あなたがたがみ声を聞いたなら、……心を、かたくなにしてはいけない」（ヘブル3：7、8）。{SC 1945.3}

「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」（サムエル上16：7）。人の心には、喜びと悲しみがあるかと思えば、横道にそれようとするわがままな心があって、

さまざまの不純と虚偽が宿っています。神は、その動機、意図、また日的そのものをごらんになるのです。汚れたそのままの心で神のみもとに行きましょう。詩人がうたったように、すべてをご覧になる神にすっかり心を開け放して「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」（詩篇139：23、24）と呼ばわりましょう。{SC 1945.4}

世には宗教を頭だけで受け入れ、敬虔の形だけを受け入れて、心の清められていない人が多くあります。私たちは「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」（詩篇51：10）と祈りましょう。自分の魂の状態を吟味し、身に危険が迫っていると思って、たゆまず、また熱心でなければなりません。これは、神とあなたの魂との間で解決されるべき問題、永遠に決定すべき問題です。ただ、そうあればよいと望んでいるだけで、それ以上何もしないならば滅びるよりほかありません。祈りと共に神のみ言葉を研究してみるならば、み言葉は神のおきてとキリストの生涯を通して、清めという大原則を教えていることを知り、また、この清めがなくては「主を見ることはできない」（ヘブル12：14）ということがわかってくるのです。またそれは、罪と救いの道を明らかに示します。私たちは、これを神が魂に語るみ声として、耳を傾けなければなりません。{SC 1945.5}

罪の恐ろしさを知り、自分自身をありのまま見つめるとき、絶望してはなりません。キリストは罪人を救うためにおいでになりました。私たちは、何も自分で神とやわらぐのではありません。――ああ、なんと驚くべき愛でしょう――神はキリストによって、「世をご自分に和解させ」（Ⅱコリント5：19）られたのです。神は優しい愛をもって、道に迷った神の子らの心を求めておられます。世の中のどん

な親であっても、神が救おうとしておられる人々を忍ばれるほどに、子供たちの失敗やあやまちを忍ぶことはとうていできません。誰も、これほどの優しさをもって、罪を犯した者に訴えることはできません。また、これほど優しく迷える者を呼び返そうとした方はありません。神のみ約束もご警告もみな、言葉ではあらわすことのできない愛の息吹きにほかならないのです。 {SC 1945.6}

悪魔がきて、あなたは恐ろしい罪人であると言うならば、あがない主を仰ぎその功績を語りなさい。キリストの光をながめることは大きな助けになります。自分の罪を認めるとともに敵には、「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」（Ｉテモテ 1：15）と告げねばなりません。そして、その測り知れない愛によって救われることを語りなさい。イエスはシモンに、2人の借財ある者について質問なさいました。1人の負債は少額でしたが、もう1人は多額の負債を持っていました。しかし主人は2人ともゆるしました。さて、キリストはシモンに、どちらが主人を深く愛したであろうかとお尋ねになりました。シモンはそれに答えて「多くゆるしてもらったほうだと思います」（ルカ7：43）とこたえました。私たちは大いなる罪人でしたが、私たちがゆるされるためにキリストは死なれたので、彼の犠牲の功績は私たちのかわりに神の前にささげられるに十分でした。最も多くゆるされた者がキリストを一番愛するようになり、その御座の最も近くに立って、その大きな愛と限りない犠牲をほめたたえるのです。神の愛が本当によくわかった時に、罪の深さがわかるのです。私たちを救うために下げられている鎖の長さを知り、キリストが身代わりになって払われた限りない犠牲をいくらかでも悟るとき、心は言い知れぬ感謝にあふれ、悔いくずおれずにはいられないのです。 {SC 1945.7}

第4章- 告白

「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」（箴言28：13）。 {SC 1946.1}

神のあわれみを受ける条件は簡単で、しかも正しく合理的です。神は、私たちの罪がゆるされるには、何か面倒なことをしなければならないとは要求なさいません。長途の巡礼の旅に出たり、痛々しい苦行をしたりして、天の神に自分が良く思われようとしたり、罪の償いをしようとしなくてもよいのです。ただ罪を言いあらわして、これを離れる者はあわれみを受けるのです。 {SC 1946.2}

使徒ヤコブは、「互いに罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」（ヤコブ5：16）と言っています。神のほか罪をゆるすことはできませんから、罪は神に告白しなければなりません。そして、過ちは互いに言いあらわすのです。もし友人や隣人をつまずかせたならば、自分は悪かったと認めて謝るのです。そして、それをこころよくゆるすのはその人の義務です。そうしたあとで神のゆるしを求めなさい。というのは、あなたが傷つけた兄弟は神のものですから、彼を傷つけたことは、彼の創造主、またあがない主に罪を犯したことになるからです。そしてこのことは、まことの仲保者であり、大祭司であるイエスの前に持ち出されます。主は、「わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」（ヘブル4：15）たのですから、どんな罪の汚点をも清めてくださいます。 {SC 1946.3}

自分の罪を認めて神の前にへりくだらない者は、神に受け入れられる最初の条件さえ果たしていないわけです。再び悔いることのない悔い改めをし、本当にへり

くだった砕けた心で罪を告白し、自分の罪悪を心から憎んでいるのでなければ、真に罪のゆるしを求めたとは言えません。また、罪のゆるしを求めたことがなければ、神よりの平和を見いだすことはできません。私たちが過去の罪のゆるしを味わっていないただ一つの理由は、心を低くして真理のみ言葉の条件に従っていないからで、この点について次のようにはっきりと教えられています。罪の告白は、それが公のものであっても、個人的なものであっても、真心から、そして十分に言いあらわされなければなりません。罪人に無理に強いて言わせるものではありません。また、告白は軽率に不注意になされてはなりません。本当に、罪がどんなに忌まわしいものであるかを認めていない人に強いるものでもありません。心の奥底からわき出てきた告白は、限りないあわれみを持つ神へ通じます。詩人ダビデは、「主は心の砕けた者に近く、たましいの悔いくずおれた者を救われる」（詩篇34：18）と言っています。 {SC 1946.4}

真の告白は常に、はっきり自分の犯した罪そのものを言いあらわすのです。神にだけ告白すべきものもあるでしょう。または、だれか害をこうむった人々に告白しなければならないものもあるでしょう。あるいは公のものであれば、公に告白しなければならないこともあるでしょう。いずれにせよ、告白はすべてはっきりとその要点にふれていて、犯した罪そのものを認めねばなりません。 {SC 1947.1}

イスラエルの人々は、サムエルの時代に神より迷い出て、罪の結果に苦しまねばなりませんでした。それは彼らが、神への信仰と、神は知恵と能力をもって国を治められることを見失い、さらに神はご自身の働きをあくまで守られることを信じなくなったからです。彼らは宇宙の大いなる統治者を離れ、周囲の国々と同じような統治者を望んだのです。しかし平和を得るためには、次のようなはっきりした告白をしなければなりませんでした。「われわれは、もろもろの罪を犯した上に、ま

た王を求めて、悪を加えました」（サムエル上12：19）**と。つまり、悪かったと自覚したその罪が告白されなければならなかったのです。彼らの忘恩の精神が彼らの魂をおさえ、神より切り離していたのでした。** {SC 1947.2}

真面目な悔い改めと改革が伴わない告白は、神に受け入れられることはできません。はっきりとした変化が生活にあらわれ、神のきらわれるすべてのものを捨てねばなりません。本当に罪を嘆いた結果はそうなるのです。私たちのなすべきことは、はっきりと示されています。「あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」（イザヤ1：16、17）**。「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに歩み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない」（エゼキエル**33：15）**と。またパウロは、悔い改めについて「見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである」（Ⅱコリント**7：11）**と言いました。** {SC 1947.3}

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めもしなければ、自分が犯した罪の恐ろしさを悟ることもありません。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的に見えないでいるわけです。ですから、その人の告白は真面目でもなければ熱心でもありません。自分の罪を認めて悪かったとは言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起こらなかったら、自分はああもしなかったしこうもしなかったし、何もしかられることはなかったのだと言います。 {SC 1947.4}

アダムとエバは、禁断の木の実を食べた後、言うに言われぬ恐れを強く感じました。最初、どのように自分たちの罪の言いわけをして、恐ろしい死の宣告を逃れようかと考えました。神が、彼らの罪を正された時、アダムはその罪をなかば神に、なかば自分の同伴者に負わせて「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」と答え、女はその責めをへびに負わせて「へびがわたしをだましたのです、それでわたしは食べました」（創世記3：12、13）と言いました。 {SC 1947.5}

どうしてあなたはへびをお造りになったのですか、どうしてへびをエデンの園にお入れになったのですかという質問が、この罪の言いわけのうちに含まれているのであって、それは彼らの堕落の責任は神にあると言っているのです。自己を義とする精神は、偽りの父である悪魔よりきたもので、アダムの息子、娘はみなこの精神をあらわしました。こうした告白は聖霊に動かされたものではありませんから、神に受け入れられることはできません。真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、何の虚飾も偽善もなく、罪を認めるのです。哀れな取税人のごとく目を天に向けることさえしないで、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と叫ぶのです。自分の罪を認める者は義とされます。というのは、イエスは悔い改めた魂のために、自らの血をもって、執り成されたからです。 {SC 1947.6}

神のみ言葉には、悔い改めと謙遜の実例があげられていますが、そこには罪の言いわけをしたり、自己を正しいとするようなことが少しもない、真心からの告白の精神が見られます。パウロは、自分を弁護することなく、自分の罪をその恐ろしいままに描き、罪をいくらかでも軽くしようなどとは考えませんでした。彼は、次のように言っています。「多くの聖徒たちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。それから、いたるところの会堂で、しばしば彼ら

を罰して、無理やりに神をけがす言葉を、ぞわせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りました」（使徒行伝26**：**10、11**）。また、「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださった』……わたしは、その罪人のかしらなのである」（Ｉテモテ**1**：**15**）と言ってはばからなかったのです。** {SC 1948.1}

真に悔い改め、謙遜になった心は神の愛のいくぶんかを悟り、カルバリーの十字架の犠牲を心から感謝してやみません。そして子供が優しい父親に告白するように、本当に悔い改めた者は、神の前に自分の罪をみな持って行きます。み言葉にも「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」（Ｉヨハネ1**：**9**）と記されています。** {SC 1948.2}

第5章- 献身

神は、「もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会う」（エレミヤ29：13、14）と約束されました。{SC 1948.3}

私たちは全身をささげて神に従わねばなりません。さもなければ、私たちを神のみかたちに回復する変化は起こらないのです。私たちは、生まれながら神から遠ざかっています。聖霊は私たちの状態を次のように言っています。「自分の罪過と罪とによって死んでいた者」（エペソ2：1）、「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで完全なところがなく」（イザヤ1：5、6）と。私たちは全く「悪魔に捕らえられて」（Ⅱテモテ2：26）彼の思いのままに、しっかりととりこにされているのです。神は私たちをいやし、解放しようと望んでおいでになります。けれどもこれには全き改革、つまり私たちの性質を全く新しくしなければなりませんから、私たちは自己を全く神にささげなければなりません。{SC 1948.4}

自己との戦いは最も大きな戦いです。自己に打ち勝ち、神のみ心に全く従うには戦いを通らねばなりません。しかし神に服従しなければ、魂が聖化されることはないのです。{SC 1948.5}

神の政府は盲従を要求し、不合理な統制を行おうとするものであると、悪魔は私たちに思わせようとしますが、そうではありません。それは知性と良心に訴えるものです。「さあ、われわれは互いに論じよう」（イザヤ1：18）と、創造主は私たち造られた者を招いておられます。神は決して造られた者の意志を強いたりなさいません。真心より、自らよく理解したうえでの服従でなければ、神は受け入れられません。単なる強制的服従は知性や品性の真の発達を妨げるものであって、人を

一つの機械人形にしてしまいます。創造主はこのようなことを望まれません。神は創造の極致である人間が最高の発達を遂げることをお望みになります。 {SC 1948.6}

神は、私たちの前に最高の祝福をおいて、恵みによって私たちをそこまで導こうとなさいます。また私たちのうちに彼のみ心を行うことができるように、自己を神にささげよと勧めます。罪の絆から放たれて、神の子としての栄えある自由を味わうか否かは、私たちの選択にかかっています。 {SC 1948.7}

神に自己をささげるには、私たちを神から引き離すものをすべて捨てなければなりません。ですから、「あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」（ルカ14：33）と救い主は言われているのです。たとえ、どんなものであっても神から心を引き離すようなものは捨てなければなりません。多くの人は富を偶像にしています。金を愛し富を欲することは、彼らを悪魔につなぐ黄金の鎖です。ある人々は名声や世的な栄誉を神としています。また、なんの責任も負わず、利己的な安楽な生活を偶像にしている人もいます。けれども、こうした奴隷の絆は断ち切らねばなりません。私たちは、なかば神に、なかば世につくことはできません。全く神のものでなければ神の子供ではないのです。神に仕えていると公言しながら自分の努力によって神のおきてに従い、正しい品性を形づくり、救いを得ようとしている人があります。このような人たちの心は、キリストの愛に強く動かされたのではありません。天国に入るために神が要求されるものであるからという理由で、クリスチャン生活の義務を遂行しようと努めているにすぎません。そのような宗教は何の役にも立ちません。もしキリストが心に宿るならば、魂は彼の愛と、彼との交わりからくる大きな喜びに満ちあふれて、キリストに結びつき、彼を熟視して自己を忘れてしまいます。そしてキ

リストへの愛が行動の源泉となります。神の強く迫る愛に感激した者は、どのくらいささげれば神のご要求を満たすことができようか、などと最低の標準を尋ねたりしないで、あがない主のみ心に全く服従したいと望みます。熱心に、希望にあふれてすべてをささげ、彼らが求めている価高き者にふさわしい関心を示します。この深い愛がなくて、キリストを信ずると告白することは単なる話だけであり、無味乾燥な形式、また重苦しい苦役です。{SC 1948.8}

あなたはキリストに全く服従することは、あまりに大きな犠牲であるとお感じになるでしょうか。「キリストは私に何を与えてくださったか」ということを考えていただきたいのです。神のみ子は、すべてのものを――いのちと愛と苦しみとを――私たちをあがなうためにお与えになりました。こうした大きな愛の対象としてはあまりに無価値な私たちが、自分の心を神にささげないでいられるでしょうか。私たちは、生涯の一瞬一瞬、キリストの恵みをこうむって生きてきました。私たちは、どのような無知と悲惨のどん底から救われたかを自覚していないのです。私たちは、自分たちの罪が刺し通したキリストをながめながら、彼の愛と犠牲を侮蔑することができるでしょうか。栄光の主の限りなきへりくだりをよく知りながら戦い、そしておのれを卑しくしなければいのちに入ることができないと言って、つぶやいてよいものでしょうか。{SC 1949.1}

「悔い改めて心を低くしなければ、神に受け入れられたという保証が得られないのは、どうしたことであろう」と尋ねる高慢な人が多くあります。そういう人はキリストをごらんなさい。彼は罪を犯されなかったばかりでなく、天の王」二でしたが人類の身代わりとなって罪人となりました。「とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」（イザヤ53：12）。私たちがすべてをささげると言っても、いったい何をささげる

のでしょう。それは、イエスに清められ、その血によって洗われ、彼の無比の愛によって救われるためにささげる罪に汚れた心だけです、それなのに人々は、それを捨てがたいと思っています。私はそういう話を聞き、また書くことさえ恥ずかしいのです。{SC 1949.2}

神は、私たちが持っていて益になるものは、何一つ捨てるようにとはお求めになりません。何をなさるにも、いつもその子らの幸福を考えておいでになります。自分が今求めているよりはるかに良いものを神は備えておいでになるということを、キリストを選んでいないすべての人が悟られるよう望みます。人は神のみ心に逆らって考え、行動するとき、自分の心に大きな害を及ぼしています。何が最善であるかを知り、造られた者の幸福のために計画しておいでになる神が禁じられる道には、本当の喜びを見いだすことはできません。罪の道は悲惨と滅亡の道です。{SC 1949.3}

神は子らが苦しむのを見てお喜びになると考えるのは誤りです。全天が人の幸福に関心をもっているのです、私たちの天の父はだれにも喜びの道を閉じることはありません。しかし苦しみと失望をもたらし、幸福と天国への戸を閉じてしまうようなことにふけってはならないと私たちを戒めています。不完全で弱く、欠点があるそのままの姿で人々を受け入れ、これを罪から清め、その血によってあがなわれたばかりでなく、世の救い主は彼のくびきを負い、その荷をになうすべての者の心の欲求を満たしてくださいます。いのちのパンを求める者に、平和と平安をお与えになるのが神のみこころなのです。また、神は私たちに定の義務を果たすよう要求されますが、それは不従順な者たちには決して到達することのできない祝福の高みに私たちを導くためです。心の真の喜びは、栄えの望みであるキリストを心の中に形づくることです。{SC 1949.4}

「私はどうすれば神に自らをささげることができるでしょう」と、尋ねる人が多くあります。そして、自分を神にささげたいと望んでいながら、道徳的力が弱く、疑惑の奴隷となり、罪の生活の習慣に支配されています、どんな約束も決心も、砂のなわのように弱く、自分では自分の思想、衝動、愛情を制することができません。こうして約束を破り、誓いを裏切って自分の誠実さに自信が持てなくなり、神は自分を受け入れてくださらないのではないかと思うようになります。しかし絶望するには及びません。ただ必要なのは、本当の意志の力とは何であるかを知ることです。意志とは人の性質を支配している力、決断力、選択の力です。すべてはただ意志の正しい行動にかかっているのです。神は人間に選択の力をお与えになりました。つまり、人がそれを用いるようにお与えになったのです。私たちは自分の心を変えたり、また自分で愛情を神にささげることはできません。けれども、神に仕えようと選ぶことはできます。意志は、神にささげることができます。そうすれば、神は私たちのうちにお働きになって、神の喜ばれるように望み、また行うようにしてくださいます。こうして性質は全くキリストの霊に支配されるようになり、キリストが愛情の中心となり、思想もまた彼と一致するようになります。 {SC 1950.1}

善と清さを望むのは正しいことですが、そこでとどまるなら何の役にも立ちません。クリスチャンになりたいと望みながら、滅びていく人が多いのです。彼らは、神に自分の意志をささげるところまでこないからです。つまり彼らは、いまクリスチャンになることを選ばないからです。 {SC 1950.2}

意志を正しく働かせるならば生活は全く変わってしまいます。意志をキリストに全く服従させることによって、どんな主義よりもカよりも、はるかにまさったカに自分を結びつけることになるのです。そして、天よりの力を得てしっかりと立つ

ことができ、絶えず神に服従することによって新しい生涯、すなわち信仰の生涯を送ることができるようになるのです。 {SC 1950.3}

第6章 - 信仰

聖霊によって私たちの良心が目覚めると、罪がいかに忌わしく、罪の力、罪のとが、また罪からくる災いがどんなものであるかがいくらか分かってきて、罪を憎む上うになります。罪が自分を神より引き離してしまい、自分は悪の力の奴隷になっていることに気づくのです。逃れようと、もがけばもがくほど、自分の力なさを感じます。動機は不純で心は不潔で、自分の生活は全く利己心と罪ばかりであるのを知り、何とかしてゆるされ清められて、自由になりたいと望むのです。神と調和し、神に似るにはいったい何をすればよいのでしょうか。 {SC 1950.4}

あなたに必要なものは平和です。つまり天のゆるしと平和と愛を心にいただくことです。それは、金で買うことも知識で達することも、また知恵で手に人れることもできません。自分の力では絶対に手に入れることは望めないのです。けれども神は、これを「金を出さずに、ただで……買い求」（イザヤ55：1）める賜物として与えられるのですから、ただ手をのばしてそれをつかみさえすれば自分のものとなるのです主は、「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ」（イザヤ1：18）。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け」（エゼキエル36：26）ると言われます。 {SC 1950.5}

あなたは自分の罪を告白して、心よりこれを捨て去り、神に自らをささげようと決心なさいました。ですから今、神のもとに行き、罪を洗い去って新しい心を与えてくださいと願いなさい。そして、神がお約束なさったのですから、そうしてくださると信じなさい。これはイエスのこ在世の時に教えられた教訓であって、神が私たちにお約束になった賜物は、それを得たと信じるときに、私たちのものとなる

のです、人々が彼の力を信じた時、イエスは病気をおいやしになりました。イエスはまず、人々を目で見えるものでお助けになって、目に見えないこと、すなわち罪をゆるす力についても、彼に信頼をおくようにお教えになりました。{SC 1951.1}

イエスは中風の病人をいやす時に、このことをはっきりと言われました。「『人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために』と言い、中風の者にむかって、『起きよ、床を取りあげて家に帰れ』」（マタイ9：6）と。同じく伝道者ヨハネも、キリストの奇跡について「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」（ヨハネ20：31）と言っています。{SC 1951.2}

イエスが病人をおいやしになったという簡単な聖書の記録から、私たちは罪のゆるしを得るためには、どのようにして彼を信じればよいかについていくらか知ることができます。ベテスダの中風患者のことを考えてみましょう。哀れな病人は、38年も体の自由を失っていたのです、しかしイエスは、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と言われました。この病人は、「主よ、もし私をいやしてくださるならばみ言葉に従います」とも言えたでしょう。しかし彼は、キリストのみ言葉を信じ、自分がいやされたと信じてすぐに立って歩こうとしました。歩こうとしたときに実際に歩くことができたのです。彼は、キリストのみ言葉に頼って行動しましたので、神は彼に力を与え、彼はすっかりいやされたのです。{SC 1951.3}

罪人である私たちも同じです、過去の罪をあがなうことも、自分の心を変えることも自分自身を清くすることもできません。しかし神は、こうしたことをすべてキリストを通してしてくださるとお約束なさいました。あなたはまずそのみ約束を

信じ、罪を告白し、自らを神にささげて、神に仕えようと決心しなければなりません。これを実行しさえすれば、必ず神はそのみ約束を果たしてくださるのです、神のみ約束を疑わずゆるされ、清められたと信じさえすれば、神はそれを事実としてくださるのです。中風の病人が自分がいやされたと信じたとき、キリストが歩く力をお与えになったと同じようにあなたはいやされるのです。信じたようになるのです。{SC 1951.4}

いやされたと感じるまで待ってはなりません。そして「信じます。いやされています。私がそう感じるからではなく、神がこれを約束されたからです」と言いましょう。{SC 1951.5}

イエスは「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」（マルコ11：24）と言われましたが、このみ約束には条件が1つあります。それは神のみ旨に従って祈るということです。けれども、私たちの罪を清め、神の子らとして清い生活を送らせようとなさるのは神のみこころです。ですから、これらの祝福を願い求め、それを受けたと信じて神に感謝してもよいのです。イエスのもとにきて清められ、恥じるところなくおきての前に立つことができるのは私たちの特権です。聖書にも「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない……これは……肉によらず霊によって歩く」（ローマ8：1、4）とあります。{SC 1951.6}

ですから、私たちは自分のものではなく、価をもって買われたものです。「あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」（Ⅰペテロ1：18、19）とあります。神を信じるこの簡単な行為によって、聖霊は私たちの心に新しいいのちを与えます。私たちは神の家族の子供と

して生まれたのです。ですから、神はみ子を愛されると同様に私たちを愛してくださるのです。{SC 1951.7}

さて、あなたは自分をキリストにささげたのですから、退いたり、また自分を取りもどしたりしてはなりません。ただ日ごとに「私はキリストのものです。私は自分をキリストにささげました」と言って、聖霊を与えられ、彼の恵みによってささえられるよう祈りましょう。自己を神にささげ、神を信じるとき神の子となるのですから、そのように神にあって生活しなければなりません。使徒パウロも、「あなたがたは主キリスト・イエスを受けいれたのだから、彼にあって歩きなさい」（コロサイ2：6）と言いました。{SC 1952.1}

世の中には、自分たちは試験されているのであって、心を改めた証拠がなければ、神の祝福を受けることができないと考えている人々がいます。しかし、今すぐにでも祝福を求めて受けることができるのです。神の恵み、キリストの霊を受けて、自らの弱さを補うのでなければ悪に抵抗することはできないのです、イエスは、私たちが罪に汚れたのみとするものもないままで、みもとに行くのをお喜びになります。私たちは、弱さ、愚かさ、罪深さなどをみな持ったまま悔いの涙をもって、主の足もとにひざまずいてよいのです。主は愛のみ手のうちに私たちをいだき、傷をつつみ、すべての汚れから清めることをご自身のほまれとなさいます。{SC 1952.2}

多くの人があやまったのはこの点であって、イエスは個人的に、一人一人にゆるしを与えられることを信じないのです。彼らは神のみ言葉をそのとおり信じません。しかし、だれでも条件に従うならば、いかなる罪のゆるしも価なく与えられることを、はっきり知ることができるのです。神のみ約束は、自分のためではないなどという疑いは捨てなければなりません。このみ約束は、悔い改める罪人一人一人

のためです。キリストが備えておられた能力と恵みは、み使いによって、信じる魂一人一人に与えられます。どんなに罪深いからといっても、彼らのために死なれたイエスから能力と純潔と義とを受けることができないという人はありません。イエスは罪に染まって汚れた衣を脱がせ、義の白い衣を着せようと待っておいでになります。死ぬことなく、生きなさいと招いておいでになるのです。{SC 1952.3}

神は、人間が互いをあしらうように私たちをあしらいません。彼は、愛とあわれみといつくしみ豊かな神です。「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」（イザヤ55：7）。「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」（イザヤ44：22）と言っています。{SC 1952.4}

「わたしは何びとの死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」（エゼキエル18：32）。悪魔は、この尊い神よりの保証を奪い去り、人の心から希望と光を消し去ろうとしていますが、そうさせてはなりません。試みる者に耳を貸してはなりません、イエスは私が生きるために死んでくださったのです。彼は私を愛し、私が滅びるのを喜ばれません。私にはまた愛にあふれる天の父があります。私は、天の父の愛をないがしろにし、せっかく与えられた祝福を無駄にしましたが、立って天の父のみもとに行き「わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇い人のひとり同様にしてください」と言わねばなりません。このたとえは、さまよい出た者がいかに迎えられるかを次のように語って

います。「まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいてせっぷんした」（ルカ15：18～20）。{SC 1952.5}

これは実に優しく、人の心を動かさずにはおかない物語ですが、これだけでは、まだ天の父の限りないあわれみを十分にあらわしてはいません。主は預言者を通し、「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」（エレミヤ31：3）と言われました。罪人がまだ父の家から遠く離れた異国で財産を浪費しているとき、父の心はその子の身の上を案じているのです。そして、神へ帰りたいという気持を彼の心に起させるのはみな、聖霊のやさしい訴えの声であって、さまよい出た者へ熱心に話しかけ、哀願し、父なる神の愛の心に引きつけようとしておられるのです。{SC 1952.6}

聖書には、こうしたみ約束がたくさんありますから、疑う余地はどこにもありません。哀れな罪人が帰りたいと思い、罪を捨てたいと願っているのに、主は彼が罪を悔いて主の足もとに来るのを拒むなどと考えられるでしょうか。決してそのようなことを考えてはなりません。天の父がそのような方であると考えることほど、魂を傷つけるものはありません。神は、罪を憎みますが罪人をお愛しになります。{SC 1953.1}

神がキリストをお与えになったことは、ご自分をお与えになったことでした。そして望む者はだれでも救われ、栄光のみ国で限りない祝福にあずかることができるようにしてくださったのです。神が私たちに対する愛をあらわすためにお用いになった次の言葉ほど、強く優しい言葉はありません。「女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない」（イザヤ49：15）。{SC 1953.2}

疑い、わななく人々よ、目を上げて見ようではありませんか。イエスはなお生きて、私たちのために執り成しをしておられます。神が愛するひとり子をお与えになったことを感謝するとともに、彼の死が無駄にならないよう祈りましょう。聖霊は今日、あなたを招いておられます。全心をささげて、イエスのもとに行きましょう。そうすれば主の祝福を自分のものとすることができるのです。 {SC 1953.3}

み約束を読むとき、そのみ言葉は言いあらわすことのできない愛とあわれみの表現であるということを覚えましょう、無限の愛の神のみ心は、はかり知れないあわれみをもって罪人をひきつけています。「その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである」（エペソ1：7）。そうです。あなたを助けることができるのは、ただ神のみであることを信じてください。神はご自身の真のかたちを人間のうちに回復したいと望んでおられます。告白と悔い改めによって神に近づくならば、神はあわれみとゆるしをもって私たちに近づかれるのです。 {SC 1953.4}

第7章- 弟子としての証拠

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、べてが新しくなったのである」（Ⅱコリント5：17）。{SC 1953.5}

人は、いつどこで悔い改めたか、あるいはどんな階をふんで回心したかを、はっきり語ることはできいかも知れませんが、それであるからといってそのが悔い改めていないとは言えません。キリストはニデモに、「風は思いのままに吹く。あなたはその音聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである」（ヨハネ3：8）と言われました。風は目には見えませんが風の通った結果は、はっきりと見たり感じたりすることができます。聖霊が人の心に働くのも、ちょうど同じです。人の目には見えませんが、再創造の力が魂に新しい命を与え、神のみかたちにしたがって新しい人をつくるのです。聖霊の働きは音もなく目にも見えませんが、その結果は明らかなものです、聖霊によって心が新たにされるならば、生活がその事実を証明します。私たちはどのようにしても自分の心を変えたり、神と調和したりすることはできないのです。また、自己や自分の良い行いに頼ることもできませんが、心のうちに神の恵みを宿しているかどうかは私たちの生活にあらわれてきます。性格に、習慣に、いっさいの行動に変化が起こりますから、過去と現在との間にはっきりと決定的な対照が見られるようになります。人の性格はときどきの善行とか過ちでわかるのではなく、日常の言動の傾向によって知ることができるのです。{SC 1953.6}

キリストの力によって新たにされなくても、人は外見だけ正しい行いを装うこともできます。権勢を求める気持ちから、人からよく思われたいとの気持ちから、

正しい生活を送ることもできるでしょう。自尊心も、私たちが人から悪く見られるのを防いでくれるかも知れません。{SC 1954.1}

あるいは利己主義な人が、情け深い行為をすることもありましょう。では、私たちがどちらの側に立っているかを、どんな方法ではっきり決めることができるでしょうか。{SC 1954.2}

私たちの心を支配しているのは誰でしょうか。私たちは誰のことを考えているでしょうか。また、誰のことを話すのが好きでしょうか。私たちが何よりも愛情をささげ、何よりも努力を傾けようとするのは誰のためでしょうか。もし私たちがキリストのものであれば、彼とつの心になり彼を思うのが一番の楽しみとなり、私たちの持ち物も、私たち自身もすべて彼にささげてしまいます。そして主のみかたちに似、主の霊を呼吸し、主のみ心をなし、すべてのことにおいて主を喜ばせたいと願うようになります。{SC 1954.3}

キリスト・イエスにあって新たにつくられた者は霊の実を結びます。つまり「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」（ガラテヤ5：22、23）を生じるのです。もはや、彼らは以前の欲望に従って歩まず、神のみ子を信じてそのみ足跡にならって歩み、そのこ品性を反映しながら清くあるように、自らを清くするのです。以前には嫌っていたものを今は愛するようになり、かつて愛していたものは嫌うようになります。高慢、不遜な人は、柔和、謙遜になります。軽はずみで落ち着きのない人は真面日で控え目になり、酒に酔う者はそれをやめ、放蕩者は純潔になります。世的なむなしい習慣や流行を追う気持ちはなくなり、クリスチャンは「外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない」（Ｉペテロ3：3、4）飾りを求めるようになります。{SC 1954.4}

ですから、もし改革が起らなければ真に悔い改めたとは言えません。質にあずけた物を戻し、奪ったものを返し、罪を告白し、神と人とを愛するようになったならば、その人は確かに死より生に移っているのです。{SC 1954.5}

あやまちがあり、罪あるままの姿でキリストに行き、赦罪の恵みを受けるとき、心の中に愛がわき起ります。キリストが課すくびきはやさしいのですからすべての重荷は軽くなります。義務は喜びとなり、犠牲は楽しみになります。以前には暗黒に包まれていたように見えた道も、義の太陽に照らされて明るくなります。{SC 1954.6}

キリストのうるわしい人格は、彼に従う者のうちに見られるようになります。神のみ旨をなすことがキリストの喜びでした。神への愛と栄えをあらわそうとする熱情は、救い主の生涯を動かしていた力です。愛が救い主の行動をすべて美化し、高尚にしたのです。愛は神から来るものです。まだ清められていない心はその愛をつくり出すことも、生み出すこともできません。それはただ、イエスが支配する人の心にのみ見いだすことができます。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからである」（Ⅰヨハネ4：19）。神の恵みによって新しくされた心のうちでは愛が行為の原則となります。愛は性格を改変し、衝動を支配し、欲情を制し、また敵意をおさえ、愛情を高尚にします。この愛が心のうちに秘められ、あたりに高貴な感化を及ぼすのです。{SC 1954.7}

ここに、神の子ら――特に神の恵みに頼り始めた者が誤りがちなことが2つあります。これは特別に注意しなければならない事柄です。まず第一に、前にも述べたように自分の行為をながめ、自分の力を頼みとして神と調和しようとすることです。自分の行為によっておきてを守り清くなろうとしている人は、不可能なことを

しようとしているのです。人がキリストなしにすることはすべて利己心と罪に汚れています。信仰によるキリストの恵みのみが私たちを清めるのです。{SC 1954.8}

それとは反対ですが、同じように危険なことは、キリストを信じれば人は神のおきてを守らなくてもよいという考えです。つまり、ただ信仰によってキリストの恵みにあずかるようになったのであるから、行いは私たちの救いと全く関係がないというのです。{SC 1954.9}

けれども服従ということは、単なる外面だけのものではなく、むしろ愛の奉仕を指すのです。神のおきては神の品性そのものを表現したものであり、愛の原則を具体化したものですから、天にあっても地にあっても神の政府の基礎です。私たちの心が神のみかたちに似て新しくされ、神の愛が心のうちに植えつけられるならば、神のおきては日々の生活に実行されるのではないでしょうか。{SC 1954.10}

愛の原則が心に植えつけられ、私たちの心が創造主である神のみかたちに似て新たにされるとき、はじめて「わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」（ヘブル10：16）という新しい契約が成就されるのです。こうしておきてが心に記されるとき、それはその人の生活を左右するのではないでしょうか。服従すなわち愛よりでた奉仕と忠誠は、弟子であることの真のしるしです。聖書にも「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」（Ｉヨハネ5：3）、「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない」（Ｉヨハネ2：4）としるされています。人は服従しなくてもよいというのではありません。信仰ーただ信仰のみが私たちをキリストの恵みにあずからせ、服従できるようにするのです。{SC 1955.1}

私たちは服従によって救いを買うのではありません。救いは神から価なしに与えられる賜物であって、信仰によって受けるのです。服従は信仰の実なのです。「あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におるものは、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく知ったこともない者である」（Ｉヨハネ3：5、6）。これが本当の試験法です。もし、私たちがキリストにあり、神の愛が私たちの心に内住するならば、私たちの感情も、思想も、行動も、神の清いおきてにあらわされた神のみ心に調和するようになります。「子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行う者は義人である」（Ｉヨハネ3：7）。義とは、シナイ山で与えられた十戒にあらわされた神の清いおきての標準によって定められるものです。 {SC 1955.2}

キリストを信じれば神に服従する義務はないという、いわゆる信仰は、信仰ではなく憶測です。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである（エペソ2：8）と言われていま魂けれども「信仰も、それと同様に、行いを伴わなければ、それだけでは死んだものである」（ヤコブ2：17）ともしるされています。 {SC 1955.3}

また、イエスご自身も、この地上に来られる前に、「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます、あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」（詩篇40：8）と言い、再び天にお帰りになる直前には、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである」（ヨハネ15：10）と言われました。聖書には、「わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである……『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」（Ｉヨハネ2：3、6）、「キリストも、あなたがた

のために苦しみを受け、み足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」（Ｉペテロ2：21）とあります。{SC 1955.4}

とこしえの命を受ける条件は、私たちの祖先が罪に陥る前、すなわちパラタマスにいたときと全く同じであって、それは神のおきてに完全に服従すること、つまり完全に義であることです。もし、とこしえの命がこの条件以下で与えられるものであるとすれば、全宇宙の幸福は危険にさらされ、罪の道が開けてあらゆる災いと悲惨とが永久に絶えないことでしょう。{SC 1955.5}

罪に陥る前、アダムは神のおきてに服従することによって、正しい品性をつくり上げることができましたが、彼はこれに失敗し、彼の罪のために、私たちは生まれながら罪あるものとなり、自分の力で義となることはできなくなりました。私たちは罪深く汚れているので、清いおきてに完全に従うことができません。神のおきての要求に応じるほどの義を持ち合わせていません。けれどもキリストは、私たちのために逃れる道を備えてくださいました。キリストは、この地上で私たちがあわねばならない試練と誘惑の真っただ中

で生活し、罪なき生涯をお送りになりました。そして、私たちのために死に、今や私たちの罪を取り除いて、自己の義を与えようとしておいでになります。もし自分をキリストにささげ、キリストを自分の救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでいかに罪深いものであっても、彼のゆえに義とみなされるのですキリストの品性があなたの品性の代わりとなり、神の前に全く罪を犯したことのない者として受け入れられるのです。{SC 1956.6}

これればかりでなく、キリストは私たちの心までも変えてくださいます。信仰によって、キリストは心のうちに住まれます。こうして、信仰と、たえずキリストに

自らの意志を従わせることによって、キリストとの関係を持続するのです。このようにするかぎり、キリストはあなたのうちに働いて、み旨に従って志をたて、行うことができるようにしてくださいます。そのときこそ「わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ2：20）と言うことができるのです。ですから、キリストも弟子たちに、「語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である」（マタイ10：20）と言われました。こうしてキリストが私たちのうちにお働きになるならば、私たちは、キリストと同じ精神をあらわし、同じ業正しい行為、つまり服従をするようになろのです。 {SC 1956.1}

ですから、私たち自身のうちには、何ら誇るところはなく、何の自己を賞揚する根拠もありません。私たちの唯一の希望は、キリストの義が私たちに被せられることで、それは私たちのうちに働き、私たちを通して働いてくださる聖霊の働きによるほかはないのです。 {SC 1956.2}

私たちが信仰について語るとき、信仰には区別があることを心にとめておかねばなりません。つまり、本当の信仰とは全く違ったある種の信仰があることです。神の存在とその力またみ言葉が真理であることは、悪魔もその軍勢も心のうちでは否定できない事実として信じているのです。聖書には「悪霊どもでさえ、信じておののいている」（ヤコブ2：19）とありますが、これは信仰ではありません。神のみ言葉を信じるというばかりでなく、神に意志を服従させ、心をささげ、愛情を注いでこそ、信仰があると言えるのであって、そうした信仰は愛によって働き魂を清めるのです。この信仰によって、心は神のみかたちにつくりかえられます。人の心というものは、新たに再生されなければ神の律法に従わず、また従う力を持ちませ

ん。しかし、聖なるおきてを喜ぶときに、詩篇作者とともに次のように言うことができます。「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」（詩篇119：97）。そして、おきての義が「肉によらず霊によって歩く」（ローマ8：4）私たちのうちに全うされるのです。{SC 1956.3}

世にはキリストのゆるしの愛を知り、本当に神の子になりたいと望んでいながら、自分の性格が不完全で、生活にはあやまちが多いために、いったい自分の心が聖霊によって新たにされたかどうかと疑う人があります。こうした場合に決して失望、落胆してはなりません。私たちは幾たびとなく、欠点やあやまちを悔いてイエスの足もとに泣き伏すことでしょう。けれども、そのために失望してはなりません。たとえ敵に敗れても、神に捨てられ拒まれたのではありません。キリストは神の右に座し、私たちのために執り成しておられます。使徒ヨハネは「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」（Ⅰヨハネ2：1）と言いました。また「父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」（ヨハネ16：27）というキリストのみ言葉も忘れてはなりません、神は、あなたを自己に立ち返らせ、自らの純潔と聖潔とをあなたのうちに反映しようと望んでおいでになります。ただ神に従いさえすれば、すでにあなたのうちに良きことを始められた神は、イエス・キリストの日までその働きを続けてくださるのです。ですから、もっと熱心に祈り、もっと深く信じましょう。自分の力に信頼できなくなったとき、あがない主の力を信じ、私たちを助けてくださる主を賛美しましょう。{SC 1956.4}

イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくは

っきりと見えるからです。これは悪魔の惑わしの力が失われ、人を生かす聖霊の力が働いている証拠です。 {SC 1957.1}

自分の罪深さを悟らない人の心には、イエスに対する深い愛も宿りません。キリストの恵みによってつくりかえられた魂は、キリストの清い品性をほめたたえます。しかし、もし私たちが自分の道徳的欠陥を知らないとすれば、それは、キリストの美しく優れた品性をまだ見たことがないという明らかな証拠です。 {SC 1957.2}

自分の無価値なことを悟れば悟るほど、救い主の限りない純潔とうるわしさとがわかってきます。自分の罪深いことを知ってゆるしを与えられる救い主のもとに走りより、魂の力なさを悟ってキリストに手をのべます、すると、キリストはあらわれ力をそえるのです。必要に迫られ、キリストと神のみ言葉に近づけば近づくほど、私たちはキリストの品性をもっとよく知るようになり、そのみかたちを十分に反映するようになります。 {SC 1957.3}

第8章- 弟子としての証拠

心が変化して神の子となることを、聖書では生まれると言っています、また、農夫のまいた良い種が芽を出すことにもたとえています。悔い改めてキリストを信じ始めたばかりの者も同様に「今生まれたばかりの乳飲み子」（Ｉペテロ2：2）として「成長し」（エペソ4：15）、キリスト・イエスにある全き人にまで成長しなければならないのです。また、畑にまかれた良い種のように生長して実を結ばねばなりません。イザヤも、彼らは「義のかしの木ととなえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」（イザヤ61：3）と言っています。こうして自然界のいろいろの例があげられて、私たちに霊的生活の不思議な真理が理解しやすいようになっています。 {SC 1957.4}

人間がどんなに知恵と技巧を注いでも、自然界の一番小さなものにさえ、その中に生命をつくり出すことはできません。植物にせよ動物にせよ、生きることができるというのはただ神が与えられたいのちによるのです。同じように、神から出るいのちによってのみ、霊的生命が人の心のうちに生まれるのです。人は「新しく生まれ」（英文傍注・「上より生まれ」）（ヨハネ3：3）ないかぎり、いのちを受けることができません。キリストはそのいのちを与えるためにこの世界に下ったのです。 {SC 1957.5}

いのちにおけると同様に、成長においてもそうです。つぼみから花を開かせ実を結ばせるのは神です。種が生長し、「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」（マルコ4：28）というのは神の力によるのです。預言者ホセアは、イスラエルについて「彼はゆりのように花さき」「園のように栄え、ぶどうの木

のように花さき」（ホセア14：5、7）と言っています。またイエスも私たちに「野の花のことを考えてみるがよい」（ルカ12：27）と言われました。{SC 1957.6}

木や花は自ら思いわずらったり、努力したりして生長するのではなく、神が与えるものによって、そのいのちがささえられ、生長するのです。子供はどんなに思いわずらい、またどんなに努力しても、身の丈を延ばすことはできません。私たちも全くこれと同じで、心づかいや自分の努力では霊的に成長はできないのです。植物も、また子供たちも、周囲のものからいのちをささえるものすなわち、空気、日光、食物を受けて成長します、動物、植物にとって白然の賜物が必要なように、キリストに頼る者にとってはキリストが必要です。キリストは、彼らの「とこしえ……の光」（イザヤ60：19）、「日です、盾です」（詩篇84：11）と記されてあります。また、キリストは「イスラエルに対しては露のように」（ホセア14：5）、「刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、地を潤す夕立のごとく臨むように」（詩篇72：6）とあります。彼は、生ける水です。「神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」（ヨハネ6：33）。{SC 1957.7}

神は、み子という比類なき賜物を与えて、ちょうど空気が地球のまわりを取りまいているように、恵みの雰囲気で全世界を包みました。このいのちを与える空気を吸いたいと望む者は、誰でも生きることができ、キリストにある全き人となることができるのです。{SC 1958.1}

ちょうど、花が輝かしい光線の助けを借り、美しく咲こうとして太陽に向かうように、私たちも義の太陽を仰いで天の光に照らされ、私たちの品性がキリストのかたちに似るまでに成長しなければなりません。{SC 1958.2}

「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。……わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである」（ヨハネ15：4、5）とのイエスのみ言葉は、これと同じことを教えています。木の枝が生長して実を結ぶのには、その幹に連なっていなければならないのと同様に、清い生涯を送るには、キリストに頼らねばなりません。キリストを離れてはいのちも、誘惑を退ける力も、恵みと聖潔に成長する力もありません。 {SC 1958.3}

しかし、彼のもとにいれば栄えるのです。キリストからいのちを受けるのですから、しぼむこともなければ、実を結ばぬこともなく、川のほとりに植えられた木のように茂ります。 {SC 1958.4}

さて、何か自分だけでしなければならないことがあると考えている人がたくさんあります。彼らは、キリストに頼って罪のゆるしを得ていながら、正しい生活を自分の力で送ろうとするのです。しかし、そうした努力はみな失敗に終わります。イエスは「わたしから離れては、あなたは何一つできない」と言われます恵みに成長することも、私たちの喜びも人のために役だつこともみな、キリストと一つになるか否かにかかっています。恵みに成長するのは、毎日、毎時、彼と交わり、彼にあることによります、キリストは、私たちの信仰の導き手であると同時に、これを全うされた方です。キリストは、始めであり終わりであり、常に臨在されるのです。ですから私たちの旅路の始めと終わりばかりでなく、その道すがら一歩一歩キリストにいていただかなくてはなりません。ダビデは「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」（詩篇16：8）と言いました。 {SC 1958.5}

「いったいどうすれば、キリストのもとにいることができるのでしょうか」と尋ねる人がありますが、それは最初に主を受け入れたときと同じようにしたらよいのです。「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあって歩きなさい」（コロサイ2：6）、また「わが義人は、信仰によって生きる」（ヘブル10：38）とあります。あなたは、自分を神にささげ、全く神のものとなり、神に仕え、神に従い、キリストをあなたの救い主として受け入れたのです。あなたは自分では自己の罪をあがなうことも、心を変えることもできませんでした。しかし神に自己をささげ、神がこれをすべてキリストのゆえになされたと信じたのです。信仰によってキリストのものとなったのですから、また、信仰によってキリストのうちに成長するのです。これは、こちらからも与え、また、神からも受けることです。自分の心も意志も奉仕もすべてを神にささげ、神のご要求にことごとく従わなくてはなりません。そして、服従する力を受けるには、あらゆる祝福に満ちあふれるキリストを心に宿し、キリストをあなたの力、義、また永遠の助けとして受けなければなりません。 {SC 1958.6}

毎朝、神に自己をささげ、これを最初の務めとして、次のように祈りましょう。「主よ、しもべを全くあなたのものとしてお受け入れください。私のすべての計画をあなたのみ前におきます。どうか、しもべを今日もご用のためにお用いください。どうか、私と共にあって、すべてのことをあなたにあってなさせてください」と。これは毎日のことです。毎朝、その日一日、神に献身して、すべての計画を彼にお任せし、摂理のままに実行するなり、中止するなりするのです。こうして、日ごとに生涯を神のみ手にゆだねるとき、しだいにあなたの生涯がキリストの生涯に似てくるのです。 {SC 1958.7}

キリストにある生涯は、平和な生涯です。感情の興奮はないかも知れませんが、いつも変わらない平和な信頼をもった生活です。自分に望みがあるのではなく、キリストに望みがあるのです。自分の弱さはキリストのカに、無知はキリストの知恵に、もろさはキリストの持久カと一つになります。すると私たちは、自分をながめて自分のことばかりを考えないで、キリストをながめるようになるのです。キリストの愛をめい想し、その性格の美しさ、完全さを心にとめて考えましょう。キリストの自己犠牲、キリストのへりくだり、キリストの純潔と聖潔、またその比類なき愛を魂のめい想課題といたしましょう。キリストを愛し、キリストにならい、全くキリストに頼ってこそ、私たちはキリストのみかたちに変えられるのです。 {SC 1959.1}

イエスは「わたしにつながっていなさい」と言われました。この言葉は、やすみ、安定、信頼という意味を含んでいま魂またイエスは私たちを招いて、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ11：28）と言われました。同じ思想を詩篇記者は「主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め」（詩篇37：7）と言っています。またイザヤも、「穏やかにして信頼しているならば力を得る」（イザヤ30：15）と言いました。 {SC 1959.2}

この休みは、何もしない状態というのではありません。というのは、救い主の休みの約束への招待は働きに対する召しも伴っているからです。「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」（マタイ11：29）。キリストにあって真に体息できる心は、最も熱心に、活動的に、キリストのために働きます。 {SC 1959.3}

自己のことを考えていると、心は、カといのちの源であるキリストから離れていきます。そして、悪魔は、人の心を救い主からそらそうと絶えず努力して、キリ

ストとの一致と交わりを妨げようとするのです。世の快楽、生活上の心配事、悩み、悲しみ、他人の欠点、または、自分の欠点や不完全さ、こうしたものの全部、またはそのどれかに私たちの心をひこうと、悪魔は必死になっています。悪魔の策略に迷わされてはなりません。本当に良心的で、神のために生きたいと望んでいる人々にさえ、悪魔は、自己の欠点や弱さのことばかり考えさせ、こうしてキリストから離してついには勝利を得ようと願っています。私たちは、自己を中心に考えてはたして自分は救われるかどうかと心配したり恐れてはなりません。これはみな、私たちの心を力の源である救い主から離してしまいます、魂を全く神にゆだねて神を信頼し、イエスのことを語り、考え、自己をキリストのうちに消失させてしまわねばなりません。すべての疑惑をすて、恐怖をすて去り、使徒パウロとともに「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ2：20）と言いましょう。神を信じて安んじましょう。神は、そうして自分を託す者を必ず守られるのです。もし、神のみ手に自己をお任せするならば、あなたを愛される神は、勝ち得てあまりあるほどにしてくださいます。{SC 1959.4}

キリストは、人性をおとりになったとき、愛の絆で人類をご自身に結びつけました。しかしこの絆は、人間が故意に離れないかぎり、どんな力でも切り離すことのできないもので、悪魔は常にこの絆を断ち切ろうとし、私たちが自分から選んでキリストから離れるように誘惑してきます。{SC 1959.5}

そこで私たちは、ほかに主を選ぶというような誘いに陥らないよう警戒し、努力して祈る必要があります。どちらを選ぶのも常に自由です、キリストから目を離

さないかぎり、キリストは私たちを守ってくださいます。イエスをながめていれば私たちは安全であって、何者もイエスのみ手のうちより私たちを奪うことはできません。常にイエスをながめることによって私たちは「主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に一変えられていく」（Ⅱコリント3：18）ようになるのです。{SC 1959.6}

初代の弟子たちが、愛する救い主に似るようになったのも、こうした方法によったのです。弟子たちは、イエスのみ言葉を聞いて、自分たちはイエスを必要としていると感じたので、まず求め、見いだし、ついにイエスに従ったのでした。彼らは、家の中でも、食卓でも、私室でも、野外でも、いつも主と共にいました。ちょうど先生と生徒が一緒にいるように毎日そのくちびるより清い真理を学びました。また、彼らは、僕が主人につかえて義務を学ぶように、主を仰いだのでした。これらの弟子たちも、「わたしたちと同じ人間」（ヤコブ5：17）であって、彼らも罪に対して、私たちと同じように戦わねばなりませんでした。彼らも、清い生活を送るには、同じ恵みを必要としたのです。{SC 1959.7}

救い主のみかたちを一番よく反映したと言われる愛された使徒ヨハネでさえ、生まれつき美しい性格の持ち主ではありませんでした。彼は差し出がましく名誉心の強い人でした。そればかりでなく血気にはやって、何か害でも受けるとすぐ怒りちらすたちでした。けれども、聖なるキリストの性格を見せられたとき、彼は自分の欠点を知り謙遜になりました。神のみ子の日常生活に接して、力強いうちにも忍耐深く、権威があるうちにも優しく、犯しがたい尊厳のうちにも謙遜なその姿をながめて、彼の魂は賞賛と愛で満たされました。日一日と、彼の心はキリストに引きつけられ、ついに主を愛するあまり自分を忘れてしまいました。彼の怒りやすい野

心満々たる気質はキリストの感化力に屈服し、聖霊の更生力が彼の心を新しくしました。{SC 1960.1}

つまり、キリストの愛の力が性格を一変させてしまったのであって、これは、イエスと一つになった確かな証拠です。キリストが心のうちに住まれるとき性格全体が変化し、キリストの霊、キリストの愛が心を和らげ、魂を制御し、思想や欲求を神と天に向けるのです。{SC 1960.2}

キリストの昇天されたときも、主はなお共におられるという感覚を弟子たちはもちました。それは愛と光に満ちた個人的存在としてでした。弟子たちと共に歩み、語り、祈り、彼らの心に希望と慰めを与えられた救い主イエスは、平和の言葉を語りながら、彼らを離れて天にあげられました。天使の群れがイエスを受け止めると、弟子たちに聞こえたのは「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（マタイ28：20）との救い主のみ言葉でした。イエスは、人のかたちのまま昇天なさいました。弟子たちは、イエスが神の御座の前にあってもなお自分たちの友であり、救い主であり、また思いやり深い点においても変わりなく、悩み苦しむ人類と強い関係にあることを知っていました。イエスは、彼のあがなわれた者のために払った価の記念となった手足の傷を示して、自らの尊い血の功績を神の前に述べているのです。弟子たちは、イエスが天にのぼられたのは場所を備えるためであって、再び来て、自分たちを受け入れてくださるということも知っていました。{SC 1960.3}

主の昇天後、彼らは集まって、イエスのみ名によって天の父に熱心に願いをささげていました。厳粛なうやうやしい気持ちをもって頭をたれ、確証の言葉をくり返しながら祈っていました。「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたこ

とはなかった。求めなさい、そうすれば与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう」（ヨハネ16：23、24）、「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」（ローマ8：34）という確かなあかしをもって、彼らは信仰の手を高く高く延ばしたのです。{SC 1960.4}

こうしてキリストが、「あなたがたのうちにいる」（ヨハネ14：17）と言われた慰め主なる聖霊が、ペンテコステの時に彼らに与えられたのです。キリストは「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」（ヨハネ16：7）と言われましたが、それ以来、キリストは聖霊を通してつねにその子らの心のうちに住まれるのです。こうして彼らは、この地上に主がおられたときよりいっそう近く主と一つになることができたのです。内住するキリストの光、愛、そして力が弟子たちから輝き出たので、人々は驚き、「不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であること」（使徒行伝4：13）を知るようになったのです。{SC 1960.5}

キリストは、最初の弟子たちに対してなされたと同じことを、今日も、その子らになそうと望んでおいでになります。それは、少数の弟子の前で祈られた最後の祈りの中で「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします」（ヨハネ17：2）と言われたことによってもわかります。{SC 1961.1}

イエスは、私たちのためにも祈り、ご自身が天の父と一つであったように、私たちも天の父と一つになれるようにとお願いになりました。これは何ととうとい一致でしょう。救い主もご自身について「子は……自分からは何事もすることができ

ない」（ヨハネ5：19）、**「父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである」（ヨハネ**14：10）**と言われました。もしキリストが私たちの心のうちに住んでくださるならば、キリストは私たちのうちに働いて「その願いを起こさせ、かつ実現に至らせ」（ピリピ**2：13）**てくださるのです。キリストがお働きになったように私たちも働き、その同じ精神をあらわすようになります。こうしてキリストを愛し、キリストのうちにあって、私たちは「あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達」（エペソ**4：15）**するようになるのです。** {SC 1961.2}

第9章- 人生と活動

神は、宇宙のいのちであり、光であり、喜びの源です。ちょうど太陽の光のように、また、泉からわき出る水の流れのように、祝福が神からすべての造られたものに流れ出ます。そして、神のいのちが人の心のうちに宿っていればどこであっても、愛となり、祝福となってほかに流れていきます。 {SC 1961.3}

私たちの救い主は、堕落した人間を向上させてあがなうことを喜ばれます。であればこそ、彼はご自分のいのちを惜しまず、十字架をしのび恥をもいといませんでした。天の使たちもまた、他の幸福のために働きこれを喜びとしています。利己的な人々は、不運な人々、また卑しい性格の人や下層階級の人々のために働くことは恥であると思っていますが、そのような仕事を罪のない天使たちがしているのです。天に満ちあふれているのは、キリストの自己犠牲的愛の精神です。これこそ、犬国の幸福の本質ともいうべきものであって、キリストに従う者が持たねばならぬ精神であり、なさねばならぬ働きです。 {SC 1961.4}

キリストの愛が心のうちに宿るとき、それはちょうど、かぐわしいかおりのように隠すことはできません。その清い感化は、この人に接するすべての人に感じられま丸心のうちにキリストの精神が宿っていれば、それは砂漠の泉のように流れ出てすべてをうるおし、今にも死にそうな人にいのちの水を飲ませます。 {SC 1961.5}

イエスを愛するならば、人類の祝福と向上のために、イエスが働かれたたように働きたいと望むようになります。そして、天の父の保護のもとにあるすべての造られたものをやさしく愛し、同情するようになります。 {SC 1961.6}

救い主の地上における生涯は、安楽な自己中心の生活ではありませんでした。彼は、たゆまず熱心に失われた人類の救いのために労されました。馬槽からカルバリーに至るまで、彼は自己犠牲の道をたどり、至難なわざ困難な旅路など、いかなる労苦をも避けようとはなさいませんでした。{SC 1961.7}

彼は「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」（マタイ20：28）と言われました。これがその生涯の大きな御目的で、その外のことは第二義的なもの、付随的なものでした。神のみ心をなし、神のみわざを成し遂げることは救い主の食物でした。彼の働きのうちには、私心とか私欲とかは全く見られませんでした。{SC 1961.8}

そのように、キリストの恵みにあずかった人々は、喜んでどんな犠牲をも払い、キリストがいのちを与えた他の人々も天の賜物を受けることができるようにいたします、彼らはできるかぎりを尽して、この世を少しでも住み良い世の中とします。真に悔い改めた者の心には、必ずこうした精神が見られるようになるのです。人は、ひとたびキリストに来るやいなや、イエスはいかに尊い友であるかを他の入に知らせたいと望みます。人を救い清める真理は、どうしても心のうちに秘めておくことはできません。私たちがキリストの義の衣をまとい、内住する聖霊の喜びで満たされているならば、黙っていることはできないはずです。もし、主の恵みを味わい悟ることができたならば、何か誌いたくなるものです。ピリポが救い主を見いだしたときのように、他の人々を主のみ前に誘わずにはいられなくなるでしょう。そして、彼らにキリストの美と、見えざる世界の現実性について話したいと思うでしょう。またイエスがたどられた道を踏みたいと熱心に願い、周囲の人々に「世の罪を除く神の小羊」を仰がせたいと切望するようになるでしょう。{SC 1961.9}

他人を祝福しようとする努力は、かえって自分自身の祝福となって戻ってきます。神が私たちをあがない、計画の一部に携わらせてくださるのはこのためです。神は、人に神の性質をもつ特権をお与えになりましたが、これは他の人に祝福を分かつためです。これは神が人類にお与えになる最高の栄誉であり、最大の喜びです。こうして愛の働きの共労者となる者は、創造主の最も近くにはべるのです。 {SC 1962.1}

神は、福音宣伝の働きをはじめ、すべての愛の奉仕の働きを天使にお任せになることもできました。また、別の方法によって目的を達成なさることもできました。しかし、神は限りない愛をもって、私たちを神、キリスト、天使と共に働く者として選び、自己を忘れて働くことから来る祝福、喜び、霊的向上に私たちをあずからせてくださったのです。 {SC 1962.2}

私たちは、キリストと苦しみを共にすることによって、キリストと一つになります。他人の幸福のためになす自己犠牲の行為はことごとく、与える者の心をますます情け深くし、そして「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」（Ⅱコリント8：9）と記されている世のあがない主にいっそう近く結びつけます。こうして、私たちを創造された神の目的を果たす時はじめて、生きていることが私たちの祝福となるのです。 {SC 1962.3}

もし、キリストがその弟子たちに望まれたように働き、主に魂を導こうとするならば、私たちは神についていっそう深い経験とさらに広い知識の必要を感じ、飢えかわくように義を慕うようになります。こうして神に求めるならば、信仰は強められ、魂は救いの泉から思う存分飲むことができます。反対や試練にあえば、かえ

って聖書に親しみ祈るようになり、ますます恵みとキリストの知識に成長し、豊かな経験に導かれるのです。{SC 1962.4}

自己を忘れて他人のために働く精神は、その人の性格に深さと落ち着き、キリストのようなうるわしさを加え、平和と幸福をもたらします。彼の抱負は高められ、怠惰とか利己心の余地はなくなります。こうして、クリスチャンの美徳を実行する人は成長し、強くなり、神のために働きます。彼らは、霊的なことをはっきりと理解するようになり、動揺することなく、信仰に成長し、祈りにおいて力を増します。神の霊が人の心にふれて働くと、それに答えて、心は美妙な音を奏でます。このように、他人の益のために我を忘れて働く者は、必ず自分の救いを全うするのです。{SC 1962.5}

恵みに成長するただ一つの方法は、キリストがお命じになった働きを自己を忘れてすることであって、助けを必要としている人に、私たちの力の及ぶ限り助けと祝福を与えることです。力は使えば出てきます。生きるには活動しなければなりません。恵みによって与えられる祝福を受動的に受け、キリストのため何もしないでいながら、クリスチャンのいのちを保とうと努力している人は、働かないでただ食べてばかりいて生きようとしているのと同じです。自然界と同じように霊界でもこれでは衰えてしまうよりほかありません。手足を使わないでいれば、やがて手足を動かす力を失ってしまいます。それと同様に、神がお与えになった力を使わないクリスチャンは、キリストにまで成長しないばかりでなく、すでに持っていた力さえ失ってしまうのです。{SC 1962.6}

キリストの教会は、人類の救いのために神がお定めになった機関であって、世界に福音を伝えることがその使命です。そして、その義務は、クリスチャン一人一人の肩に負わせられていて、だれでもその力、機会に応じて、救い主このご命令を

全うしなければなりません。私たちにはキリストの愛があらわされたのですから、キリストを知らないすべての人々にそれを知らせる義務があります。神は、私たちのためばかりでなく、他の人をも照らすため光を与えられたのです。{SC 1963.1}

もし、キリストに従う者がみな、自分の義務にめざめるならば、今日ただ一人いるところに数千の者がいて、異邦の地に福音を宣べ伝えていることでしょう。また、直接、個人的にみわざに従事できない人は、資金によってまたは同情や祈りによって、それを支えることができます。キリスト教国にあっても、もっと熱心な努力があって良いはずです。{SC 1963.2}

もし家庭内に、キリストのためになすべき働きがあるとすれば、私たちは、異邦の地に行ったり、家庭から離れる必要はありません。家庭内でも、教会内でも、あるいは私たちと交際する人、取り引きする人々の間においてでも働くことができます。{SC 1963.3}

イエスは、この世の生涯の大部分をナザレの大工小屋で忍耐強くお働きになりました。いのちの主が人から認められもあがめられもせず、農夫や労働者と肩を並べてお歩きになったときにも、奉仕の天使は主に付き添っていました。イエスは、貧しい家業にいそしんでおいでになった時も病人をいやしたり、ガリラヤ湖の荒れ狂う波の上をお歩きになった時と同じように忠実にその使命をお果たしになりました。ですから私たちも、この世のどんな卑しい仕事をしていても、また、どんな低い地位にあっても、イエスと共に歩きイエスと共に働くことができます。{SC 1963.4}

使徒は「各自は、その召されたままの状態で、神のみまえにいるべきである」（Ⅰコリント7：24）と言っています。例えば実業家であれば、誠実に仕事をして主に栄光を帰すことができます。もしその人が真のクリスチャンであるならば、す

べて自分の信じている宗教にしたがって事をなし、キリストの精神を人にあらわします。また、職人であれば勤勉に忠実に働いて、ガリラヤの丘で卑しい仕事に励まれたたイエスを代表することができます。キリストのみ名を名乗る者は誰でも、他の人がその良い行いを見て、創造主、あがない主なる主をあがめるよう導かねばなりません。{SC 1963.5}

他の人の方が、自分よりも優れた才能と機会に恵まれているからという口実をもうけて、自分の賜物をキリストのために川いない人が多くあります、ただ特別な才能を持っている者だけが、神のため才能をささげて奉仕するよう要求されていると一般に考えられています。また才能は、ただ一部の特別な人々にだけ与えられているのであるから、これ以外の人々は働きをするように召されてもいなければ、報いを共に受けることもないと思っている人があります。しかし、たとえには、そのようにあらわされてはいません。この家の主人がしもべたちを呼んで、おのおのに仕事を与えました。{SC 1963.6}

愛の精神をもって、この世のどんな卑しい仕事も「主に対してするように」（コロサイ3：23）することができます。神の愛が心のうちにあれば、それは生活にあらわれてきます。キリストのよいかおりが私たちを囲み、私たちの感化は他の人々を高め祝福するのです。{SC 1963.7}

神のために働くといっても、何か大きい機会を待つ必要はなく非凡な才能などを持たなくても良いのです。人からどのように思われるかなどと気にする必要もありません。もし日常の生活が、その信仰の純潔、真実なことをあかしし、人々のため何か益になりたいと望んでいることが人々にわかれば、その努力は決して無駄にはならないのです。{SC 1963.8}

イエスのどんな卑しい貧しい弟子でも、他の人々への祝福となることができます。彼らは自分が特別に善をしているとは少しも気づかないかもしれませんが、知らず知らずの間に与えた感化が祝福の波となり、それがますます広くますます深くなっていきます。しかもその結果は、最後の報いの日まで決してわからないでしょう。何か大きなことをしていると感じることもなく知ることもありませんが、成功するかどうかなど思いわずらう必要もありません。ただ静かに前進して、神が摂理のもとに与えられた仕事を忠実にすれば、その生涯は無駄にはならず、魂はますますキリストに似てきます。彼らはこの世で神と働いて、きたるべきみ国でのより高い働きと変わらざる喜びにあずかるにふさわしい者となるのです。 {SC 1963.9}

第10章- 神についての知識

神は多くの方法を川いてご自身を私たちに知らせ、私たちを神との交わりに導いておられます。白然は絶えず私たちの感覚に話しかけていますから、心を開いているならば、神のみ手のわざにあらわされた神の愛と栄光に強く打たれるのです。また、耳を傾けて聞くならば、自然界を通して神がお語りになっているのを知ることができます。緑の野、大きな樹木、花やつぼみ、過ぎ行く雲、雨のしずく、ささやく小川、天の栄光などはみな私たちの心にささやいて、これらいっさいを創造された神を知るようにと招いています。 {SC 1964.1}

私たちの救い主は、自然界の事物に関係をつけて尊い教訓をお語りになりました。木や鳥、谷間の花、丘や湖、美しい天、それから日常のいろいろのできごとなどをみな、真理のみ言葉と結びつけて、人々がどんなに忙しい仕事に追われているときでも、その教訓を思い出すことができるようになさいました。 {SC 1964.2}

神は、私たちがみ手のわざを尊重し、また、私たちの地上の住み家を単純に、しかも落ち着いた美しさをもって飾ってくださったことを感謝するよう望まれます。神は美をお愛しになりますが、外面的などんな美しさよりも、品性の美をお愛しになります。神は私たちが、花のように、純潔、単純で、静かなやさしさを徐々に養うよう望んでおいでになります。 {SC 1964.3}

また、私たちが耳を傾けさえすれば、神の創造のみわざは、従順と信頼の尊い教訓を教えています。広く果てしない天空にあっても、太古から定められた軌道を進む星から微細な原子に至るまで、自然界のものはみな創造者のみ旨に従っています。神は、創造されたすべてのものを守り支えておられます。広い宇宙の無数の諸世界を支えられる神は、同時に何の恐れもなくさえずっている小さなすずめの必要

をも顧みられるのです。人が一日の働きに出て行くときも、祈るときも、夜休むときも、朝起きるときも、また、金持ちが立派な邸宅でふるまいをするときも、貧しい人が子供らを集めて粗末な食事をするときも、その一つ一つを天の父はやさしく見守っておいでになります。どんな涙も神の目にとまらぬものはなく、どんなほほえみも見過ごしにされることはありません。{SC 1964.4}

もしも、私たちがこうしたことを信じるならば、よけいな思いわずらいはなくなります。そして、人生も今のような失望ばかりではなくなります。神はどんなに心配や苦労をおかけしても、それに圧倒されたりはなさいません。ですから、どんなに大きなことも小さなことも、すべて神のみ手にお任せすることができるのです。こうしてはじめて、私たちは多くの人々が、長い間知らなかった心の平安を味わうことができるのです。{SC 1964.5}

この地上の美しさに心が魅せられるとき、罪にも死にもむしばまれないきたるべき世界のことを考えてみましょう。すると、そこには、もはやのろいの影は見られません。救われた者の家庭を考えてみましょう。それは、どんなにすばらしい想像力もとうてい描き出すことができないほどの立派なものであることを覚えましょう。神は自然界を美しく飾られますが、それでも私たちは神の栄光のほのかな光を見ているにすぎないのです。聖書には「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」（Ⅰコリント2：9）と記されています。{SC 1964.6}

世の詩人や学者は、自然について多くのことを歌いあるいは語りますが、真に鑑賞する力をもってこの地上の美を楽しむことができるのはクリスチャンだけです。なぜならば、彼らは天の父のみ手のわざを認め、花や木にあらわれた神の愛を認めるからです。丘や谷や川や海をながめても、それが人類に対する神の愛のあらわ

れであるとみなさない人は、その存在の意義を十分に悟ることはできません。{SC 1964.7}

神は、摂理を通し、または心にささやく聖霊の感化を通してお語りになります、私たちの事情や環境、つまり私たちのまわりで毎日起きている変化の中からも、私たちが心を開いて見ようとさえすれば、尊い教訓を得ることができます。詩篇記者は神の摂理の働きの跡をたどって、「地は主のいつくしみで満ちている」（詩篇33：5）、「すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、主のいつくしみをさとるようにせよ」（詩篇107：43）と言っています。{SC 1965.1}

神は、み言葉、聖書をもって私たちに語っておいでになります。み言葉は、神のご品性、神の人類を扱われる方法、また贖罪の大業をもっとはっきりした言葉で啓示しています。そして、父祖たちや預言者たち、また昔の聖者たちの歴史が繰り広げられています。彼らは「わたしたちと同じ人間」（ヤコブ5：17）であって、私たちと同じように失望と戦い、また私たちと同じように誘惑に負けましたが、再び勇気を出して神の恵みによって勝利を得ました。このことを知るとき、私たちも義を追い求めて戦っていかねばならないと励まされるのです。彼らが与えられた尊い経験を読み、彼らが受けた光と愛と祝福について学び、彼らが与えられた恵みにより成した働きについて読むとき、彼らに霊感を与えた同じ精神が、私たちの心にもそうしたいという励む気持ちを起こさせ、彼らの品性に似る者になりたい、彼らのように神と共に歩みたいと望むようになります。{SC 1965.2}

イエスは、旧約について「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」（ヨハネ5：39）と言われましたが、新約についてはなおさらであります。私たちの永遠のいのちの希望はあがない毛なる主にあります。聖書全体がキリストについて語っています、「できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなか

った」（ヨハネ1：3）という創造の最初の記録より「見よ、わたしはすぐにくる」（黙示録22：12）との最後の約束にいたるまで、私たちはキリストのみわざについて読み、キリストのみ声を聞くのです。もし、救い主を知りたいと思えば、聖書の研究にまさるものはありません。{SC 1965.3}

神のみ言葉を心に満たしましょう。神のみ言葉こそは渇きをいやす生ける水です。また、天よりの生けるパンです。イエスも「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」（ヨハネ6：53）と言われました。そして、それを自ら説明して「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」（ヨハネ6：63）と言われたのです。私たちの体は、私たちが飲み食いするものから成り立っています。霊界においても自然界と同じであって、私たちの考える事柄が私たちの霊性に力と健康を与えるのです。{SC 1965.4}

さて、贖罪問題は、天使たちも研究したいと望んでいるもので、それは永遠にわたってあがなわれた者の科学であり歌です。ですから、贖罪の問題は今でも熱心に研究する価値があるのではないでしょうか。イエスの無限のあわれみと愛、また私たちのために払われた犠牲は、私たちが真面目に考えねばならない問題です。私たちは愛するあがない主、また仲保者のご品性をよく考え、民を罪から救うためにこの世に来られたその使命を深くめい想しなければなりません。こうして天の事柄を考えるとき、私たちの信仰と愛はますます強くなり、私たちの祈りはいよいよ神に受け入れられるものとなります。というのは、もっと信仰と愛とが祈りのうちに織り込まれるようになるからです。その祈りは理知的な祈りとなり、まこころのこもったものとなります。そして、イエスをますますあつく信じ、日ごとに彼によって神に来る者をすべて、そして完全に救われるイエスの能力を身をもって経験するようになります。{SC 1965.5}

救い主の完全さをめい想するとき、私たちも全く変えられて救い主の純潔なみかたちに造りかえられたいと望み、尊い救い主のようになりたいと、それこそ飢えかわくほど願うようになります。キリストのことを考えれば考えるほど、キリストのことをほかの人に話すようになり、世の人々にキリストをあかしする者となります。 {SC 1965.6}

聖書は、学者のためだけに書かれたのではありません、むしろ、一般の人のために書かれたものであって、救いに必要な大真理は、真昼のように明らかに記されています。人がこのはっきりとあらわされた神のみ心を捨てて、自分の判断に従ったりしないかぎりは、誰も誤ったり、道を見失ったりすることはありません。 {SC 1966.1}

聖書の教えていることについては、人のあかしに頼ったりせずに、自分で神のみ言葉を研究しなければなりません。もし、私たちが当然自分で考えるべきことを他人に任せるようでは、せっかくの精力はそがれ、才能は衰えてしまいます。尊い脳力も、集中して思考する価値ある問題がないために萎縮し、ついには神のみ言葉の深い意味を悟る力を失ってしまいます、聖句と聖句とを対照して、聖書の問題がどう関連しているかを研究するならば知力は必ず発達します。 {SC 1966.2}

聖書の研究ほど知力を強めるのに適切なものはありません。どんな書籍でも、聖書の広範、高尚な真理ほど、人の思想を高め才能を強めるものはありません。もし、神のみ言葉を正しく研究するならば、人は広い知力と、高尚な品性、確固たる目的を持つことができますが、今日そうした人は非常にまれです。 {SC 1966.3}

ただ聖書を急いで読んだだけではほとんど益はなく、たとえ聖書全体を通読しても、その美しさを認めることができず、奥深いところに隠れた意味を了解することができないのです。しかし、わずか1節でも、その意味が心にはっきりするまで

研究し、それと救いの計画との関係を明らかにすることは、多くの章を定まった目的もなく、何らこれといった教訓も得ないで読むよりはるかに価値があります。いつも聖書を持って、機会があるごとに読み暗唱しましょう。例えば道を歩いているときでも、1節でも読んでこれを黙想するとそれが頭に残るものです。{SC 1966.4}

熱心に祈りと共に学ばなければ、知恵を得ることはできません。聖書にはわかりやすく書かれていて間違う余地がないところもあれば、また表面に意味があらわれていなくて、ひと目見ただけでは少しもわからないところもあります。聖句は聖句とよく比較して、注意深く研究し、祈りのうちによく考えねばなりません。そのような研究は豊かに報いられます。鉱夫が地下深く掘り下げて、隠れている価値ある鉱脈を発見するように、辛抱強く、神のみ言葉を、隠れている宝のごとくさがすならば、不注意な探求者の目にはとまらぬ価値ある真理を発見することができます。そして、心の中で熟考された霊感によるみ言葉は、いのちの泉からわきでる流れのようになるのです。{SC 1966.5}

聖書は、決して祈りをささげずに研究してはなりません。ページを開くときは、聖霊の導きを祈らねばなりません。この導きは必ず与えられます。ナタナエルがイエスのもとにきたとき、救い主は、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その心には偽りがない」と賛嘆の叫びをあげました。ナタナエルが「どうしてわたしをご存じなのですか」と尋ねると、イエスは「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」（ヨハネ1：47、48）とお答えになりました。イエスは、私たちが真理を知ることができるようにと光を求めるとき、それが隠れた場所の祈りであってもちゃんとご覧になっています。心を低くして神の導きを求める者には、天使が光の世界から送られるのです。{SC 1966.6}

聖霊は救い主をあがめ、救い主に誉れを帰しま実またキリストとその純潔な義をさし示し、キリストによって私たちに与えられる大いなる救いを示すのがその役目です。イエスは「わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」（ヨハネ16：14）と言われました。真理の霊のみが、神の真理を本当に教えることのできる力ある教師です。神が人類のためにそのひとり子を与えて死なせ、また聖霊を与えて人の教師とし、絶えざる案内者とすることから見て、どれほど人類を価値あるものとみなしておられるかがわかるのです。 {SC 1966.7}

第11章 - 祈りの特権

神は、自然と啓示、摂理、および聖霊の感化を通して私たちに語られます。しかしそれだけでは十分でありません。私たちも、また、神に心を注ぎ出す必要があります。霊的生命と力を得るためには、私たちの天の父と実際に交わらねばなりません。私たちは、心が神に引かれ、神のみわざ、あわれみ、祝福などを瞑想するでしょうが、これは、十分な意味での神との交わりではありません。神と交わるためには、私たちの実生活について何か神に話すことがなければなりません。 {SC 1967.1}

祈りとは、友だちに語るように、心を神に打ち明けることです。これは何も私たちがどんなものであるかを神に知らせる必要があるからではなく、私たちが神を受け入れるのに必要だからで糞祈りは、神を私たちにまで呼びおろすのではなく、私たちを神の許へひき上げるのです。 {SC 1967.2}

イエスは、この世においでになったとき、弟子たちに祈る方法をお教えになり、毎日の必要を神に求め、どんな心配事もみな神に任せるようにお教えになりました。そして、彼らの祈りは必ず聞かれるという保証をお与えになりましたが、それはまた、私たちに対する保証です。 {SC 1967.3}

イエスご自身も、この世に住んでいおられた時よく祈られました。救い主は御自ら、私たちと同じように、欠乏と弱さを覚えて、義務と試練に耐え得る新しい力を天父より受けるために、熱心に祈り求める者となりました。彼は、すべてのことにおいて私たちの模範です、彼は、弱き私たちの兄弟となり「すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」ました。しかし、罪なき方でしたので、そのご性格が悪を退けたのでした。彼は罪の世にあって、激しい心の戦いと苦悩に耐えました。彼の人間性は祈りを必要とし、また特権としました。イエスは、父

なる神と交わって慰めと喜びをお受けになりました。もし人類の救い主である神の子でさえ、祈りの必要をお感じになったのであるならば、弱い罪深い人間には、どれほど熱心な、絶えざる祈りがなければならないことでしょう。{SC 1967.4}

私たちの天の父は、あふれるばかり祝福を私たちに与えたいと待っておいでになります。限りなき愛の泉のほとりで思う存分飲むことは、私たちの特権です。それなのに私たちが少ししか祈らないのは、なんと不思議なことでしょう。神は、その子らのどんな卑しい者であっても、心からの祈りにはいつでも耳を傾けようとしておいでになりますそれにもかかわらず、私たちの方で私たちの要求をなかなか神に告げようとしない有様で寅神は、限りない愛をもって人類をみ心にかけ、いつでも私たちが求めたり思ったりする以上に与えようとしておいでになるのに、誘惑にさらされている哀れな力なき人間が格別祈ることにも努めず、信仰うすき様をみて天使たちはいったいどう思うことでしよう。天使は神のみ前にひざまずき、神のみぞばにはべることを好み、神と交わることをこの上ない喜びとしています。それなのに、神のほか与えることのできない助けを最も必要としている地上の子らが、聖霊の光も神の臨在も仰がず、満足して日を送っているように思われるのです。{SC 1967.5}

悪魔は、祈りをおろそかにする者を暗黒に閉ざし、誘惑の言葉をささやいて罪へおびき入れます。それというのも、ただ私たちが、神の定められた祈りの特権を用いないからです、祈りは、全能の神の無限の資財が蓄えられてある天の倉を開く信仰の手に握られた鍵です。それにもかかわらず、神の子らは、なぜ祈りをおろそかにするのでしょう。つねに祈り、忠実に見張っていなければ、私たちは次第に不注意になって、正しい道からそれる危険があります。敵は恵みのみ座への道を遮っ

て、私たちが熱心な祈祷と信仰によって、誘惑に耐え得る恵みと力を受けることができないように絶えず働いています。{SC 1967.6}

神が私たちの祈りを聞き、それに答えるには淀の条件があります。まず第一に、私たちは、神の助けが必要なことを感じなければなりません。神は「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」（イザヤ44：3）と約束しておいでになります、飢えかわくごとくに義を慕い、神を慕う者は必ず満たされるのです。聖霊の感化を受け入れることができるように心を開かなければ、神の祝福を受け入れることはできません。{SC 1967.7}

私たちが大いに必要としていることそれ自体が、動かすべからざる理由であり、私たちのために最も雄弁に語ってくれます。けれども私たちは、こうした必要を満たし得るものとして神を求めなければなりません一彼は「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」（マタイ7：7）と言われます。また「ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」（ローマ8：32）とも言われています。{SC 1968.1}

もし、心に不義のあることを知り、罪と知りながらそれに執着しているならば、主は、私たちの祈りに耳を傾けられません。けれども、心の砕けた悔い改めた者の祈りは、必ず聞かれるのです。心に覚えのある悪をすべて正したときに、神は私たちの祈りを聞いてくださると信じることができます。私たち自身のどんな行為も、神の恵みを受けるにはなんの価値もありません。私たちを救うのはイエスの功績であって、私たちを清めるのもイエスの血です。しかし受け入れられるには、私たちもしなければならないことがあります。{SC 1968.2}

力ある祈りのもう1つの要素は信仰です。「神に来たる者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである」（ヘブル11：6）。イエスも「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」（マルコ11：24）と弟子たちに言われました。私たちは、み言葉をこの通り受け入れているでしょうか。 {SC 1968.3}

この保証は広大無辺ですが、誠実な神のみ約束です。私たちが祈ったときに求めた通りのものが与えられなかったとしても、主は私たちの祈りを聞き、これに答えてくださることを信じなければなりません。私たちは間違いが多く、先を見ることができませんので自分の祝福にもならないことを願うことがよくあります。けれども天の父は、愛のうちにその祈りに答え、私たちのため最も良いものをお与えになります。それは、もし私たちが天よりの光に目が開かれ、すべてのもののありのままの姿をながめることができたならば、私たち自身も必ず求めるものです。私たちの祈りが聞かれないように見える時も、み約束にかたく頼らねばなりません。 {SC 1968.4}

なぜならば、祈りが答えられる時が必ずきて、私たちが最も必要とする祝福を受けることができるからです。けれども、祈りはいつも私たちが望むままに答えられ、または、望んでいるそのものが必ず与えられると考えるのは、独断もはなはだしいことです。知恵に満ちる神は、決して誤ることなく、また、正しく歩む者に良きものを拒むこともありません。ですから、たとえ祈りがすぐ答えられなくても、恐れず神に頼り「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」（マタイ7：7）という神のかたいみ約束に頼らなければなりません。 {SC 1968.5}

疑いや恐れに支配され、はっきりわからないことをみな解決した上で信仰を持とうとするならば、私たちはますます迷いの深みに陥るばかりです。けれども、もし私たちがありのままの姿で、自分の力なさ頼りなさを感じて神の許にゆき、限りない知恵を持つ神に謙遜に信頼をもって私たちの必要を告げるならば、万物をみそなわし、み旨とみ言葉をもってすべてを支配しておいでになる神は、私たちの叫びに耳を傾け、心に光を照らします。真心からの祈りによって、私たちは限りなき神のみ心に触れるのです。その時、あがない主は愛とあわれみに満ちて私たちをながめておいでになるという特別な証拠が与えられなくても、それは事実です。また彼のみ手の接触を実際には感じなくても、愛とあわれみに満ちたやさしいみ手は、私たちの上に置かれているのです。 {SC 1968.6}

神のあわれみと祝福を求める時は、私たちの心のう仁に愛》ゆるしの精神を持っていなければなりません。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」（マタイ6：12）と祈りながら、他人を許さない気持ちを持っていられるでしょうか。もし、自分の祈りが聞かれるように期待するならば、自分が許されたいと望むような態度と程度で、同じように人を許さなければなりません。 {SC 1968.7}

忍耐して祈ることは聞かれるもう1つの条件です。信仰と経験に成長しようと望むならば、私たちは常に祈らねばなりません。私たちは「常に祈りなさい」（ローマ12：12）。「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続け」（コロサイ4：2）なければなりません。 {SC 1969.1}

ペテロは信者に「心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい」（Ｉペテロ4：7）と勧めています。パウロは、「ただ事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」（ピリピ4：6）と教

えていま魂また、ユダは「しかし愛する者たちよ。あなたがたは、最も神聖な信仰の上に自らを築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛の中に自らを保ち」（ユダ20、21）と言っています。絶えざる祈りとは魂がつねに神と一致していることであって、神のいのちが私たちのいのちに流れ込み、私たちの生活から純潔と聖潔とが神に帰ることです。{SC 1969.2}

祈りは努めてしなければなりません。何物にも邪魔されてはなりません。イエスとあなたの魂との交わりを常に保つことができるよう全力を尽さねばなりません。そして祈りがささげられるところへは、努めて機会あるごとに行かねばなりません。神と本当に交わりたいと求める人は、祈祷会に出席し、自分の義務を忠実に尽し、できる限りの利益を得ようと思って熱心です。彼らは、天からの光を受けるところへはできるだけ機会をつくっていきます。{SC 1969.3}

また、家族とともに祈らねばなりません。わけても、密室の祈りをおろそかにしてはなりません。これは、魂のいのちであるからです。祈りをおろそかにしていながら、魂の健全を願うことはできません。家族の祈り、また、公の祈りだけでは不十分です。人無きところに退いて、心を探られる神のみ前に心をすっかり開かねばなりません。密室の祈りは、祈りを聞かれる神にのみ聞かれるべきで、好奇心にかられて人が聞いたりすべきものではありません。密室の祈りでは、心は周囲の影響を受けたり、また、興奮したりすることもありません。静かにしかも熱心に、神に近づこうとします。その時かくれたことをご覧になり、心からの祈りに耳を傾けられる神より、うるわしく、永久的な感化が感じられるのです。穏やかでしかも単純な信仰によって、魂は神との交わりを保ち、神から光を受けて、悪魔との戦いに立ち得るために心は強められ支えられるのです。神は、私たちの力の櫓です。{SC 1969.4}

密室で祈りましょう。毎日の仕事をする時にも、しばしば心を神に向けなければなりません。エノクはこのように神とともに歩んだのです。黙祷は、恵みのみ座の前に尊いかおりのように上っていきます。こうして、神に心を委ねた人に、悪魔は勝つことはできないのです。 {SC 1969.5}

神に祈りをささげるのに、不適当な時とか場所とかはありません。熱心な祈りの精神をもって心を天に向けるのに妨げとなるものは何もありません。雑踏した路上でも、商取引の最中でも、ちょうどネヘミヤがアルタシャスタ王の前で自分の願いを告げた時のように、神に願いをささげて導きを請うことができます。祈祷の密室はどこにでもあります。私たちは、絶えず心の戸を開いて、イエスに天来の客として心のうちに住んでいただくよう招待しなければなりません。 {SC 1969.6}

たとえ私たちは、汚れた腐敗した空気に包まれていても、その毒気を吸う必要はなく、天の清い空気の中に生きることができます。真剣に祈って心を神の前に高め、不潔、不正な思いが入らぬようあらゆる戸を閉じることができます。神の助けと祝福を受けようと心を開いている者は、この世の人よりは清い雰囲気の中を歩き、天と絶えざる交わりを続けることができます。 {SC 1969.7}

私たちはイエスをもっとはっきりながめ、永遠なるものの価値をもっと十分に知らねばなりません。神の子らの心は、清い美しさに満たされなければなりません。そして、これが成就するために、私たちは天の事柄をあらわしていただくよう神に求めなければなりません。 {SC 1969.8}

神が天の雰囲気の一息でも呼吸させてくださるよう、心を世より離して天へ向けましょう。もし、私たちが神のそば近くにいれば、どんな試みが不意に襲ってき

ても、ちょうど花が太陽の方を自然に向いているように私たちの心も神に向くようになります。{SC 1970.1}

どんな望み、喜び、悲しみ、煩い、恐れもみな神の前におきましょう。何を持ってきても重すぎたり、神を疲れさせたりすることはありません。{SC 1970.2}

頭の髪の毛でさえ数えられる神は、子らの必要に無関心ではありません。「主がいかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」（ヤコブ5：11）とあります。愛に満ちた神のみ心は、私たちが悲しみを口にすることにさえ心をいためられます、心を煩わすことはなんでも神に申し上げましょう。神は諸世界を支え、全宇宙のすべてを支配しておられるのですから、神にとって大き過ぎて支えきれぬというものはないのです。私たちの平和に関わることであったならばどんなことでも、小さすぎてお気づきにならないということはありません。私たちのどんなに暗い経験も、暗すぎてお読みになれないということはありません。またどんなに難問題でも、神には解釈できないということはありません。神の子らのいと小さき者にふりかかる災いも、心を悩ます不安も喜びの声も、くちびるからほとばしる真剣な祈りも、天の父はことごとく注意し、深い関心を払っておられるのです「主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる」（詩篇147：3）。神と各々の魂との関係は、あたかも神がただそのひとりのために愛するみ子を与えられたように、はっきりとした完全なものです。{SC 1970.3}

イエスは「あなたがたは、わたしの名によって求めるであろう。わたしは、あなたがたのために父に願ってあげようとは言うまい。父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」（ヨハネ16：26、27）、「わたしがあなたがたを選んだのである……あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」（ヨハネ15：16）と言われましたが、イエスの名によっ

て祈ることは、ただ祈りのあとにイエスのみ名を唱えるということではなく、イエスの心と精神をもって祈り、それとともにイエスのみ約束を信じ、その恵みに頼り彼のみわざに励むことです。{SC 1970.4}

神は、礼拝に専心するからといって、私たちがこの世から逃れて世捨て人となったり、修道僧になることを望んではおられません。私たちの生涯はキリストの生涯のごとく、山と群衆の間になければなりません。祈るばかりで働かない人は、まもなく祈ることをやめるか、その祈りはただ形式的な習慣になってしまいます。{SC 1970.5}

人が社会生活から離れてクリスチャンとしての義務と十字架を負うことを避け、自分たちのために熱心に働かれた主のため働くことをやめるとき、祈る主題を失ってしまい、神を拝する刺激も共に失ってしまいます。彼らの祈りは個人的になり、利己的なものになります。人類の必要やキリストのみ国の建設のために祈ることも、また働く力を求めることもできなくなります。{SC 1970.6}

神に奉仕するにあたって、互いに力づけ励ますために、互いに交わる特権を軽視すれば必ず損失を招きます。神のみ言葉の真理はあざやかさを失い、その重要性を悟らなくなってきます。そして、私たちの心は、その清めの力に照らされることも、覚醒されることもなく、霊的に衰えてしまいます。クリスチャンとしての交わりのうちにも、お互いの同情がなければ大きな損失です。自分ひとりで閉じこもっている者は、神が計画されたその人の位置を満たしていないのです。私たちの社交性を適切にじっくり育てていくなら、他人にも同情できるようになり、神に奉仕する上においても発達と力が与えられるようになります。{SC 1970.7}

もしクリスチャンが、共に交わって互いに神の愛と尊い順罪の真理について語り合うならば、自分の心がうるおされ、お互いの心がうるおされるのです。私たち

は日ごとに、天の父についてもっと学び、神の恵みを新たに受けるのです、そうすると、神の愛について語りたいと思うようになり、そして人に話せば自分の心が温められ励まされるのです。もし私たちがもっとイエスのことを話し、より少なく自分のことを考えるならば、いっそう彼の臨在を感じることができるのです。 {SC 1970.8}

神は私たちを常に守っておられますから、いつも神のことのみを考えたいと思えば常に心に神を宿し、喜んで神について語り、神を賛美しなければなりません。私たちがこの世的なことを話すのは、それに興味をもっているからです。友のことを話すのは、その友を愛し、喜びも悲しみも共にしているからです。けれども私たちは、この地上の友を愛するより以上に神を愛する大きな理由があります。ですから、何よりもまず神のことを思い、神のあわれみ深いこと、また神のみ力について語ることは、全く自然なことでなければなりません。 {SC 1971.1}

神が私たちにお与えになった賜物があまり豊かなため、私たちの思いや愛情が全部それに奪われ、神にお返しするものが何もないようではいけません。むしろ、これらの賜物は、常に私たちに神のことを思い出させ、愛と感謝の絆で恵み深き神に結びつけるためのものです。私たちは、とかくこの世のことに心を奪われがちですが、天の開かれた聖所の扉を見上げ、「彼によって神に来た人々をいつも救うことができるのである」（ヘブル7：25）。キリストのみ顔に神の栄光が輝いているのをながめましょう。 {SC 1971.2}

私たちは、もっと「主のいつくしみに、人の子らになされたくすしきみわざとのために」（詩篇107：8）神をほめたたえねばなりません。私たちの祈りは、ただ求めること、与えられることだけであってはなりません。また自分の欠乏ばかり考えていて、受けた恵みを忘れることがないようにしましょう。私たちは祈ることが

本当に少ない上に、また感謝の念に乏しい者です。絶えず神のあわれみを受けていながら、感謝を言いあらわすことが何と少なく、神が私たちのためになさったことを賛美することの何と少ない者でしょう。{SC 1971.3}

その昔、イスラエル人が礼拝のため集まったとき、老は次のようにお命じになりました。「そこであなたがたの神、主の前で食べ、あなたがたも、家族も皆、手を労して獲るすべての物を喜び楽しまなければならない。これはあなたの神、主の恵みによって獲るものだからである」（申命記12：7）と。神のみ栄えのためになされることは、賛美と感謝の歌をもって喜んでなされるべきであって、悲しい気持ちや憂うつな気持ちでなされてはなりません。{SC 1971.4}

私たちの神は、優しいあわれみある父です。神に仕ることは、悲しい心重いこととみなされてはなりません。神を礼拝し、みわざに携わることは喜びでなければなりません。かくも大いなる救いをお備えになった神は、その子らが、神をかたくなな、無情な監督ででもあるかのようにみなし、そのようにふるまうことをお好みになりません。神は、私たちの最も良き友です。{SC 1971.5}

そして、私たちが神を礼拝する時には、共にいて祝福し、慰め、その心を喜びと愛で満たそうとしてくださいます。主は、神の子らが神に仕えて慰めを与えられ、みわざに困難よりもむしろ喜びを感じるように望まれます。また神は、礼拝に集まる人々が、神の尊い守護と愛を深く感じて帰り、日物どんな仕事も喜んでなすことができ、神の恵みによって、すべてのことを正直に忠実になすことができるようにと望んでおいでになります。{SC 1971.6}

私たちは、十字架のもとに集まらなければなりません。キリストと、彼の十字架に釘づけられたこととが私たちのめい想と会話、また、何よりも喜ばしい感激に

あふれた主題でなければなりません。神から受けたすべての恵みを心にとめてその大いなる愛を悟ったならば、私たちのために十字架に釘づけられたみ手に、喜んですべてをお任せしなければなりません。 {SC 1971.7}

私たちの魂は、賛美の歌にのって天に近づきます。神は天の宮廷で、歌と音楽をもって礼拝を受けておPでになります。ですから、私たちも感謝をささげるならば、天軍の礼拝に近づくことができるのです。「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」（詩篇50：23）とあります。私たちも「感謝と歌の声」（イザヤ51：3）をもって喜びのうちにもうやうやしく創造主のみ前にまいりましょう。 {SC 1971.8}

第12章 - 疑いをいかにすべきか

多くの人、ことにまだ信仰に入って日の浅い人々は、心に疑惑をいだいで悩むことがあります。聖書の中には説明のできないこと、また理解に苦しむことが多くありますので、悪魔はそれらを用いて、聖書は神の啓示であるとの信仰を揺り動かそうとします。彼らは「どうすれば私は正しい道を知ることができましょう。もし聖書が本当に神のみ言葉であるとすれば、私は、どうすればこのような疑いと困難な問題から救われることができるでしょうか」と尋ねます。 {SC 1972.1}

神は、私たちに、信仰の基礎を置くに足る証拠を十分与えられた上でなければ、信じるようにはお求めになりません。神の存在も、品性も、また、み言葉の真実性もみな、私たちの理性に訴えるあかし、しかも多くのそうしたあかしによって確立されています。けれども、神は、疑う余地を全く取り除かれたのではありません。私たちの信仰は、外見的なものの上に築くのではなく、証拠の上に築くのでなければなりません。疑おうと思う者には疑うことができますが本当に真理を知りたいと求めている人は、信仰の基礎となる十分の証拠を発見することができます。 {SC 1972.2}

限りある心をもって、限りなき神のご性質やみわざを十分に悟ることは不可能です。どんなに鋭い知能の持ち主でも、どれほど教育を受けた人にとっても、聖なる神は神秘に包まれてよくわからないのです。「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府（よみ）よりも深い、あなたは何を知りうるか」（ヨブ11：7、8）。 {SC 1972.3}

使徒パウロは「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」（ローマ11：33）と言っています。しかしたとえ、「

雲と暗やみとはそのまわりに」あっても「義と正とはそのみくらの基である」（詩篇97：2）のです。 {SC 1972.4}

こうして私たちは神が私たちを扱われる方法、またなぜそうされたかというみ旨を理解して、無限のみ力に限りなき愛とあわれみが結びついているのを認めることができますし、また私たちの益であるかぎり神の目的を知ることができますが、それ以上は全能者のみ手と愛のみ心に一任しなければなりません。 {SC 1972.5}

神のみ言葉には、その著者である神のご性質と同じく、限りある人間には十分に理解できない神秘があります。罪がこの世に入ったこと、キリストの受肉、新生、復活、その他、聖書に記されている多くの問題は、きわめて深い神秘ですから、とうてい人間の頭脳では説明することも、十分に理解することもできないのです。けれども神の摂理の奥義を了解できないからといって、神のみ言葉を疑う何の理由にもなりません。自然界においても私たちのわからない不思議なことがいつも身のまわりに起こっています。最も下等な生物についてさえ、どんなに賢明な哲学者でも説明に苦しむ問題を投げかけています。どこを見ても、私たちの理解し得ない驚異があるのですから、霊界において私たちの測り知ることができない不思議があるからといって驚くことはないではありませんか。問題はただ、人の知力が弱く見解が狭いことにあるのです、神は聖書の中に聖書が神よりのものである証拠を十分与えておいでになるのですから、神の摂理をことごとく了解できないからといってみ言葉を疑ってはなりません。 {SC 1972.6}

使徒ペテロは、聖書の中には「わかりにくい箇所もあって、無学で心の定まらない者たちは、ほかの聖書についてもしているように、無理な解釈をほどこして、自分の滅亡を招いている」（ＩＩペテロ3：16）と言っています、聖書の難解なことが懐疑論者の聖書の攻撃の論題となっていますが、このことはかえって聖書が神

の霊感によるものであるという強い証拠です。もし聖書の神についての記録がわかりやすいことばかりで、神の偉大さと崇高さが限りある心で理解できるとするならば、聖書は間違いなく神よりのものであるという証拠はなくなるのです。 {SC 1972.7}

聖書に示されている主題が大きく神秘的であるということが、神のみ言葉であるとの信仰を起こすべきです。聖書は単純に真理を説明し、どんな人の心の必要と欲求にも答えることができるので、最高の教養ある人を驚かせてひきつけると同時に、何の教養もない卑しい者にも、救いの道を知らせることができるのです。とはいえ、この単純に述べられた真理は、実に高尚深遠な問題をとらえ、人間の理解力のとうてい及ばないものですが、神がそのように述べられたという根拠においてのみ、それをそのまま受け人れることができるのです。こうして階罪が明らかに示されていますから、誰でも神に向かって悔い改め、主イエス・キリストを信じ、神の定められた方法に従って救われるために進む道を知ることができるのです、しかし、このようにやさしく理解できる真理のかげに神秘がひそみ、見えざる神の栄光を物語っていま寅この神秘は、研究する者の心を圧倒するのですが、真面目に真理を求めている人には敬虔と信仰の念を起こさせます、そして、聖書を研究すればするほど、それが生ける神のみ言葉であるという確信が深められ、人間の理性は偉大なる神の啓示の前にひれ伏すほかないのです。 {SC 1972.8}

聖書の偉大な真理を十分に理解することができないと認めることは、限りある人知は無限を悟るに不十分であるということを認めるのです、つまり、人間は、限られた知識をもっては全能者の目的を悟ることはできないというのです。 {SC 1973.1}

懐疑論者や無神論者は、すべての神秘を測り知ることができないという理由のもとに、神のみ言葉を否定しています。そして聖書を信じると公言する者でさえ、こうした危険に陥らないとも限りません。使徒は「兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない」（ヘブル3：12）と申しました。聖書の教えを詳しく調べ、聖書に示されているかぎり「神の深みまで」（Ⅰコリント2：10）探ることは正しいことですが、「隠れた事はわれわれの神、主に属するもの」であり「表わされたことは長くわれわれ……に属」（申命記29：29）するものです。けれども、悪魔は人の研究心を曲げようと働いています。 {SC 1973.2}

聖書の真理を研究するにあたって、一種の誇りが起こり、聖書のすべての点を自分の満足できるまで説明できないと短気をおこし失望する人があります。彼らは、霊感によるみ言葉を理解することができないと自ら認めることは、ひどく屈辱であると考えます。そして、神が適当なときにその真理を示されるまで忍耐して待とうとしません。また、なんの援助もなく、人間の知恵だけで十分聖書を理解することができると考え、それができないとなると実際に聖書の権威を否定してしまいます。もっとも、世に聖書の教理として一般に信じられているものの中には、聖書にそのような根拠を全く持たないばかりか、かえって神の示された主旨と正反対のものも少なくありません。こうしたことが、多くの人たちに疑いを起こさせ困らせているのです。しかし、これは神のみ言葉のせいではなくみ言葉を曲解した人間のせいです。 {SC 1973.3}

もし、造られたものが、神とそのみわざをことごとく理解することができて、そこまで到達するのであれば、それ以上の真理の発見もなければ、知識の成長もなく、頭脳や心の発達もやんでしまいます、そうなれば、神はもはや至上者でなくな

り、知識と学識に到達した人類には、進歩の余地は無くなるでしょう。しかし、そうでないことを神に感謝せねばなりません。神は無限です。神に「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」（コロサイ2：3）とあります。そして、人は永遠に求め学び続けても、神の知恵、神の慈悲、神の力の財宝は決して尽きることはないのです。{SC 1973.4}

神は、この世でさえ、そのみ言葉の真理をいつもその民にあらわしたいと望んでおられますが、この知識を得る道はただ一つしかありません。み言葉は聖霊によって与えられたのですから、その聖霊の光に照らされてはじめて、み言葉を理解することができます。「神の思いも、神の御霊以外には知るものはない」「御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」（Ⅰコリント2：11、10）。また、救い主は弟子たちに「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう　……わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」（ヨハネ16：13、14）とお約束なさいました。{SC 1973.5}

神は、人間が理性の力を働かせるように望まれます。聖書の研究は、ほかのどんな研究にもまさって知力を強め高尚にします。しかし、理性を偶像化しないように気をつけねばなりません。これは弱い人間にありがちなことです、聖書が難しくて理解できないとかごく明白な真理でさえも理解できないなどということがないようにするには、どうしても、幼な子のような単純な信仰をもち、教えられる気持ちで聖霊の助けを求めなければなりません。神のカと知恵を悟り、神の偉大さはとうてい私たちには理解できないことを知れば、それは私たちを謙遜にし、ただ聖書を開く時でさえ神の面前に出るかのような、うやうやしい気持ちにさせるのです。聖書を学ぶにあたっては、そこに私たちの理性以上の権威を認め、心も知能も「わた

しにある」と言われた偉大なる神のみ前にひざまずかねばなりません。 {SC 1974.1}

一見、聖書には、難しく、不明瞭なことが多いのですが、神は、それを理解しようと求める人々には、わかりやすく単純にしてくださいます。けれども、聖霊の導きがなければ、聖書の意味を曲解したり、誤解したりする危険があります。聖書を読んでも何の益も受けず、かえってそれによって大きな害をこうむっている人々もあります。敬虔な心と祈りがなくて神のみ言葉を開いたり、思いと愛情が神に向いていなかったり、または、神のみ心に調和しないでいると、心は疑惑の雲でおおわれ聖書研究をしていながら、懐疑心が強められるのです。敵が思想を支配して正しくない解釈を暗示します。人が言葉にも行いにも神と一致しようと求めていなければ、いくら教育ある人であっても聖書の解釈を誤りやすくなりますから、彼らの解釈をあてにしては危険です。矛盾を見いだそうと思って聖書を探る人は、霊の目がまだ開かれていない人です偏見をもって見るので、実はわかりやすく単純な事柄でも何かと理屈を言って疑い、信じようとしないのです。 {SC 1974.2}

いろいろの仮面をかぶってはいますが、疑いと不信の真の原因は、たいていの場合、罪を愛することにあります。神のみ言葉の教えと訓戒は高慢な罪を愛する人々には歓迎されません。 {SC 1974.3}

神の要求に従うことを喜ばない者は、み言葉の権威をすぐ疑うのです。真理に到達するには真理を知りたいという真面目な望みをもって、それに喜んで従わなければなりません。こうした精神で聖書を研究する人は聖書が神のみ言葉であるという証拠を多く見いだし、その真理を理解し会得して救いに至るのです。 {SC 1974.4}

キリストは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」（ヨハネ7：17）と言われました。わからないことを疑ったり、理屈を並べたりしないで、すでに与えられている光に従うならば、さらに大きな光が与えられるのです。はっきりと理解できた義務をすべてキリストの恵みによって実行すれば、今では疑いを持っていることも理解できて、実行することができるようになります。 {SC 1974.5}

最高の教育を受けた者にも、最も無学な者にも、はっきり示される証拠は経験という確証です。神はみ言葉の真実なこと、み約束の真実であることを私たち自らが試してみるようにと言われました。神は私たちに「主の恵みふかきことを味わい知れ」（詩篇34：8）とお命じになりました。ほかの人の言葉に頼らないで、自分で味わってみなければなりません。神は「求めなさい、そうすれば、与えられるであろう」（ヨハネ16：24）とおっしゃるのですから、この約束を間違いなく果たしてくださいます。神の約束は今まで違ったこともなければ、これからも違うことはありませんそして私たちがイエスに近づき、イエスのあふれる愛にひたるとき、イエスの臨在の光に私たちの疑いも暗きも消え去ってしまうのです。 {SC 1974.6}

使徒パウロは、神は「わたしたちをやみの力から救い出して、その愛するみ子の支配下に移してくださった」（コロサイ1：13）と言いました。そして死より生へ移った人々は誰でも「神がまことであることを、たしかに認めたのである」（ヨハネ3：33）とすることができるのです。そして、その人はあかしして言います。 {SC 1974.7}

「私には助けが必要でしたが、その助けは、イエスから与えられました。すべての欠乏は補われ、魂の飢えは満たされました。今では、聖書は私にとってイエス

・キリストの啓示となりました、私がどうしてイエスを信じろかとお尋ねになりますか。それは、イエスは私にとっては天よりの救い主であるからですどうして私が聖書を信じるかといえば、それは、聖書が私の魂にとって神のみ声であることがわかったからです」と。私たちは体験によって聖書は真実であり、キリストは神の子であるということをあかしすることができます。そして、巧みな作り話を信じているのではないということを知ることができるのです。 {SC 1975.1}

ペテロは、「わたしたちの主また救い主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい」（Ⅱペテロ3：18）と言いました。神の民は、神の恵みのうちに成長するにつれて、神のみ言葉をますます明瞭に理解することができるようになります。そして、聖なる真理に新しい光と美を認めるのです。これは各時代の教会史を通じて歴史が証明していますが、なお終末までこうして継続するのです。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」（箴言4：18）。 {SC 1975.2}

私たちは、信仰によって将来をながめます。そして、人間の機能が神と結合し、魂のあらゆる能力が光の源と直接に触れ合うとき、神の約束されたように知能が伸びることを信じます、その時、神のみ摂理のうちに私たちが悩んだことはみな明らかにされ、わからなかったことも説明ができるようになります。そして、私たちの限りある心では、ただ混乱と矛盾ばかりであったところに、最も完全な美と調和を見ることでしょう。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう……しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」（Ⅰコリント13：12）。 {SC 1975.3}

第13章- 主こある喜び

神の子らはキリストの代表者として召されたものですから、主の恵みとあわれみを示さなければなりません。イエスが天の父の真の品性を私たちにあらわされたように、私たちもキリストの優しいあわれみ深い愛を知らない世の人にキリストを示さなければなりません。イエスは「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」「わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは……あなたがわたしをつかわし……になったことを、世が知るためです」（ヨハネ17：18、23）と言われました。使徒パウロは、イエスの弟子たちに向かって「あなたがたは自分自身が……キリストの手紙で」あり「すべての人に知られ、かつ読まれている」（Ⅱコリント3：3、2）と言いました。イエスは、神の子らの一人一人を手紙としてこの世に送られました。もしキリストに従う者であれば、キリストはその人を手紙として、その住んでいる家族へ、村へ、町へお送りになるのです。イエスは人の心に内住して、まだイエスを知らない人の心に話しかけたいと望んでおいでになります。おそらくその人々は、聖書を読まず聖書に書かれたことに耳を傾けたりしないでしょう。また、神のみわざを見ても、神の愛を悟らないかも知れません。けれども、もしイエスの真の代表者がいるならば、世の人々はその人を見て神の恵みを悟ることができ、イエスを愛し、仕えるように導かれるのです。 {SC 1975.4}

クリスチャンは、天国への道を照らす燈火として置かれているのですから、キリストから輝き出た光を世の人々に反映しなければなりません。クリスチャンの生活また性格は、人々が見てキリストを正しく知り、またキリストに仕えることはどんなことであるかを正しく知るに足るものでなければなりません。 {SC 1975.5}

もし私たちがキリストを代表する者であるならば、キリストに仕えることが実際にどれほど楽しいものであるかを人々に示すことでしょう。心が憂うつと悲しみで満たされ、不平不満を言ったり、つぶやいたりしているクリスチャンは、神について、またクリスチャン生活について人々の誤解を招きます。そして、神は神の子らの幸福をお喜びにならないとでもいうような印象を人々に与え、天の父に対して偽りのあかしをたてているのです。 {SC 1975.6}

悪魔は、神の子らが不信仰を起こし落胆するのを喜びます。また、私たちが神に信頼せず、神は快く私たちを救ってくださる方であることを疑うのを喜びます。また、神は摂理のうちに私たちを害されたというように考えさせ、神はあわれみと同情に欠けておられるように見せかけるのは悪魔の働きです。彼は、神に関する真理を曲解し、神に関するまちがった思想を私たちの心に満たすのです。私たちも、ともすれば、天の父に関する真理に堅く立つかわりに、悪魔の誤った言葉に惑わされ、神を信頼せずつぶやいて神を辱めるのです。悪魔は絶えず信仰生活を憂うつなものにしようと努めています。また骨が折れて困難なもののように見せかけます。そして、クリスチャンが自分の生活に対してこのような宗教観をいだくならば、その不信仰の結果、悪魔の偽りを支持したことになります。 {SC 1976.1}

人生行路をたどりながらも、自分の間違いや欠点や失望ばかりを考えて、悲しみと落胆に満たされている人がたくさんいます。私がヨーロッパに行っていたとき、ある姉妹がちょうどこのような有様で、たいへん失望し、励ましの言葉を求めてきました。その手紙を読んだ夜のことですが、私はある庭園を歩いている夢を見、その庭園の持ち主と思われる方に案内されていました。私は道すがら花を摘み、その高いかおりを楽しんでいますと、そばを歩いていたこの姉妹は、道を遮っているつまらないいばらを見て、それを悲しみ嘆いていたのです。この姉妹は、案内者に

従って道を歩かないで、いばらやとげの中を歩いて「せっかくの美しい庭園も、このようないばらがあっては本当に残念なことです」と言うのでした。すると、案内者は「いばらのことは気にしなさるな。ただ害を受けるばかりです。それより、ばらやゆりやなでしこを摘んではどうですか」と答えました。{SC 1976.2}

あなたの経験のうちに、何か明るいことがなかったでしょうか。聖霊を感じて、喜びで心がときめいた尊い瞬間はなかったでしょうか。今までの生涯の経験をふり返ってみるとき、何か楽しかったできごとはなかったでしょうか。神の約束は道ばたに一面に咲いているかおり高い花のようなものではないでしょうか、私たちはその美と甘いかおりを心から喜ぼうではありませんか。{SC 1976.3}

いばらととげは、ただ傷つけ悲しませるばかりです。いばらばかりを集めて、それをほかの人にも与えるならば、それは神の恵みを自らあなどるばかりでなく、周囲の人々をいのちの道へ導くのを妨げることになるのではないでしょうか。{SC 1976.4}

過去の生涯の不愉快な思い出、罪や失望ばかりをかき集め、そのことを語り、悲しんでついには失望してしまうことは決して賢明なことではありません。失望した魂は暗闇におおわれ、心から神の光を閉ざしてしまい、ほかの人々の行く手にも陰を投げかけます。{SC 1976.5}

しかし、神が描いてくださった輝かしい光景を感謝いたしましょう。私たちは神の愛の確証を集めて、常にそれをながめるようにいたしましょう。すなわち、神のみ子が、悪魔の勢力より人を救うために、父の御座を捨て、人性をもって神性をおおわれたこと、また私たちにかわって勝利を得、天を開き、栄光に輝く神の御座を人にあらわされたこと、さらに罪のため陥った滅びの淵より堕落した人類を救い出し、無限の神との交わりに入れてくださったこと、そして人は、あがない主を信

じて神の与えられる試練に耐え忍ぶならば、キリストの義を着せられ、神の御座にまで高められることなど、こうしたことを私たちがめい想するように神は望んでおいでになるのです。{SC 1976.6}

神の愛を疑い、神の約束に信頼しないならば、神をはずかしめ、聖霊を悲しませるのです。例えば、母親が子供の幸福と慰めの為あらゆる努力を尽くしてきたにもかかわらず、子供らはいっこうにそのようなことには気もとめず不平ばかり言うならば、母親はどう感じることでしょう。{SC 1976.7}

もし子供たちが母の愛を疑ったとしたならば、母親はどれほど悲しむことでしょう。どんな親でも、子供からそのように扱われるならば、どういう気持ちがするでしょう。それと同様に、天の父も私たちにいのちを与えるためにひとり子を賜わったその愛を私たちが信じなかったならば、私たちを顧みろことができるでしょうか。使徒は「ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」（ローマ8：32）と言っています。けれども、口で言わなくても、その行いで「神は私にこう言っておられるのではない。神は他の人々を愛したかもしれないが、私を愛しているのではない」と語っている人がたくさんあります。{SC 1977.1}

こうしたことはすべて、あなたの魂に害を及ぼします。というのは、疑いの言葉を出せば、それはみな悪魔の誘惑を招くことになるからです。そして、ますます疑惑を深め、奉仕の天使を悲しませています、ですから、悪魔に試みられる場合には、ひと言も疑いや暗い言葉を言ってはなりません。もし悪魔のささやきに耳を傾けるならば、心は不信と反抗的な疑問で満たされることでしょう。また、自分の感情を口に出し、疑いの言葉を語るならば、それは自分に返ってくるばかりでなく、種子のように他人の生涯にまかれて芽を出し実を結び、あなたの言葉の影響を取り

消すことはできなくなってしまいます。あなた自身は一時の誘惑に打ち勝ち、悪魔の罠から逃れることができるかも知れませんが、その言葉に感化された人々は、その不信からのがれることができないかも知れません。ですから、霊的な力といのちを与える事柄だけを話すということは本当に大切なことです。{SC 1977.2}

天使たちは、あなたが世の人々に天の神についてどんなあかしをするのか耳を傾けて聞いています、ですから、人と話すときには、今生きて父の前で執り成しをしておられるキリストについて語りましょう。友の手を握るときも、くちびると心をもって神をほめたたえましょう。そうすれば友人の思いをイエスにひきつけることができます。{SC 1977.3}

誰でも、試練、耐えがたい悲しみ、抵抗しがたい誘惑を持っていないものはありません。自分の悩みを友に語るのでなく、何事も祈りによって神に訴えなければなりません。疑いや失望の言葉はひと言も言わないようにいたしましょう。希望と清い直びに満ちた言葉を語ることによって、他の人をさらに明るく強く生きるよう導くことができます。{SC 1977.4}

世の中には、勇敢な人々でもひどく試みにうちひしがれ、自我や悪の権力との戦いに気を失うほどになっている人が多いのです。戦いはいかに激しくとも、失望させず、勇気と希望に満ちた言葉で励まし、前進させなければなりません。こうしてキリストの光があなたから輝き出るのです。「わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者」（ローマ14：7）なしです。私たちが気がつかないで及ぼす感化が人々を励まし強めることも、また失望させキリストと真理から退けることもできるのです。{SC 1977.5}

また、世には、キリストの生涯と品性を誤解している人が多く、キリストは、温かさも明るさも持っておいでにならず厳格、苛酷で、なんの喜びも味わわれなかったと考えています。そして、すべての宗教経験がこのような陰うつな見解に色どられていることが多いのです。 {SC 1977.6}

イエスは泣かれたが、微笑まれたことは1度もないということは、よく言われることです。私たちの救い主は、誠に、人類のあらゆる悲しみを心を開いて受けられたのですから、悲しみの人であって、悩みを知っておられたに違いありません。イエスの生涯は、白己否定の生涯であって、悲痛の陰におおわれてはいましたが、その意気はくじけることはありませんでした。み顔には、苦しみや不平の色はなく、いつも変わらない平和な落ち着いた表情が漂っていました。また、イエスのみ心は命の泉であって、彼の行かれる所はどこにも休息と平和、楽しみ、また喜びをもたらしたのです。 {SC 1977.7}

私たちの救い主は、実に真面目で熱心でしたが、決して憂うつでもなければ、気難しくもありませんでした。 {SC 1978.1}

救い主にならう人々もまた、熱心に目的をもって励むようになり、個人的責任を深く感じるようになります。軽率な行為は無くなり、騒々しい楽しみや礼儀をわきまえないような冗談は無くなります。しかし、イエスの宗教は川のような平和を与えるのです。それは喜びの光を消したり、快活さを抑制したり、明るい笑顔をくもらせたりするものではありません。キリストは仕えられるためでなく、仕えるために来られたのですそして、ひとたびキリストの愛が心を支配するとき、私たちは彼の模範に従うことができるのです。 {SC 1978.2}

もし、私たちが、他人の不親切や不正な行為を心に留めて忘れないでいるならば、キリストが私たちを愛されたように、その人々を愛することはできません。けれども、もしキリストの驚くべき愛とあわれみのことを考えているならば、その同じ精神が他の人へも流れ出て行くのです。私たちは、どんなにお互いの欠点や不完全さが見えても、お互いに愛し尊敬しなければなりません。謙遜な心を養い自己に頼ることをやめ、他人の欠点を優しく忍ぶようにならなければなりません。そうすれば、狭い利己心は根を絶ち、寛大な心を持つことができるようになります。 {SC 1978.3}

詩篇記者は「主に信頼して善を行え。そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る」（詩篇37：3）と言いました。「主に信頼して」です。私たちは一日として重荷や心配、苦労のない日はありませんから、すぐそうした困難や試練を他人に話したくなります。いろいろのとりこし苦労をしたり、恐れや心配を口に出したりするので、あたかも、すべての祈りを聞き必要な時にはいつも助けてくださるあわれみと愛に満ちた救い主がおいでにならないかのように人に思わせます。 {SC 1978.4}

また、ある人は常に恐れ、いたずらにとりこし苦労をしています。彼らは毎日神の愛のしるしにかこまれ神の摂理のうちに恵まれていながら祝福を見過ごしにしています。その人々は、何か不愉快なことが起こりはしないかとそのことばかり考えています。また実際に当面する困難は、ほんの小さいものであっても、そのために目がくらんで感謝すべき多くのことを見ることができません。ですから、困難に会えば、唯一の助けの源である神に行くかわりに、かえって不安と不満の念を起して神より離れてしまいます。 {SC 1978.5}

このように不信仰でいていいでしょうか。どうして感謝と信頼の念がないのでしょうか。イエスは私たちの友です。全天は私たちの幸福を願っています。日常生活の困難、または、労苦に悩まされることがあっても、失望してはなりません。もし、そうしたことを気にしていれば悩みの種はいつまでも尽きないのです。心配してはなりません。それはただ、私たちを悩まし疲れさせるばかりで、試練に耐えるなんの助けにもなりません。 {SC 1978.6}

業務上にいろいろの困難が起こり、前途はますます暗くなり、損失が目前に迫ることもあるでしょう。しかし失望してはなりません。心配をみな神に任せて、平静、快活にしていましょう。賢く物事を処理できる知恵を神に祈るとき、損失、失敗を免れることができるのです。良い結果をもたらすように、全力を尽して自分の分を果たさなければなりません。イエスは助けを約束しておられるからといって、何も努力しなくて良いというのではありません。私たちの助け主により頼んで最善を尽したならば、結果はなんでも喜んで受け入れましょう。 {SC 1978.7}

神の民が心配事をいだいて心重くしているのは神のみ心ではありません。主は私たちを欺かれません。主は、私たちに「何も恐れることはない。前途には何の危険もない」とは言われません。試練や危険があることをよく知っておられて、はっきりとそのように言ってくださいます。民を罪と悪の世から取り去ろうとはなさらず、間違いのない逃れの場所を示しておられるのです。イエスは、弟子たちのために「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることです」また「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」（ヨハネ17：15、16：33）とお祈りになりました。 {SC 1978.8}

キリストは山上の垂訓の中で、神に頼ることの必要について、尊い教えをくださいました。これは各時代を通じての神の子らを励ますためのもので、今日においても教えと慰めに満ちています。救い主は、空の鳥が楽しく神をたたえ少しも心配せず、「まくことも、刈ることもせず」にいるのを見よとおっしゃいました。それでも、大いなる父は、小鳥の必要を満たされます。{SC 1979.1}

「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」（マタイ6：26）と救い主は問われたのです、人にも獣にも豊かに与えられる神は、すべての造られたものの必要を満たされるのです。空の鳥でさえ、神の御目よりもれることはありません。神は食物をくちばしの中に落とすことはしませんが、必要を満たされます。小鳥は、神がちらされた穀類を集めなければなりません。また、巣を作る材料を用意し、ひなを養わなければなりません。小鳥はそれでも、歌いながら働きに出て行きます。というのも「あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる」からです。「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」です。理性を備え霊をもって拝みをなす人間は、空の鳥よりはるかに優れているのではないでしょうか。私たちを造られた神、命を支えられる神、また、私たちを自らのかたちにかたどられた神は、ただ私たちが神に信頼していさえすれば、私たちの必要を満たしてくださるのではないでしょうか。{SC 1979.2}

キリストは、野の花が一面に美しく、天の父より与えられた美を競っているのを指さして、これは神の人に対する愛の表現であると言い、また「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」（マタイ6：28）と弟子たちにおっしゃいました。ソロモンの栄耀栄華でさえ、自然の花のこうした美しさにはとうてい及ばなかったのです。芸術的技巧をこらして生み出したどんな華麗な装いも、神の造られた花の白然の華麗さには比べることはできません。イエスは、「きょうは生えてい

て、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ」（マタイ6：30）と言われます。もし天の芸術家である神が、1日で枯れてしまう草花にさえ、このように繊細ないろいろの色彩を与えられたとすれば、神ご自身にかたどって造った者に、どれほど心をとめておいでになることでしょう。キリストの教えはいたずらな思いわずらい、悩みと疑いをいだく信仰のない者への譴責です。{SC 1979.3}

主は、神の子らがみな幸福、平和、従順であるよう望んでおいでになります。イエスは、「わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」（ヨハネ14：27、15：11）と言われました。{SC 1979.4}

利己的な動機から義務の道をはずれて求めた幸福は、均衡がとれていないため変わりやすく、一時的なものです。それが過ぎ去ると、心は寂しさと悲しみで満たされます。けれども神に仕えることには喜びと満足があります。クリスチャンは、疑わしい道を歩んだり悲しみ失望の中に捨てられることはありません。たとえ、この世に楽しみがなくてもなお、来たるべき世を待ち望んで喜ぶことができます。{SC 1979.5}

しかし、この世にあっても、クリスチャンはキリストと交わる喜びがあります。また、キリストの愛の光をもち、共におられる彼より絶えざる慰めを得ることができます。人生の歩みの一歩一歩が私たちをイエスに近づけ、イエスの愛をより深く経験し、祝福された平和な家庭に一歩だけ近づけるのです。ですから、私たちの

確信を投げ棄てないで、ますますかたい保証を梶らねばなりません。「主は今に至るまでわれわれを助けられた」（サムエル上7：12）とありますが、神は終わりまで私たちを助けられるのです。主が私たちを慰め、滅ぼす者の手より私たちを救われた際の記念の塔をながめましょう。神は、涙をぬぐい、痛みを和らげ、心労を除き、恐怖を取り去り、必要を満たし、祝福をさずけられたのですが、こうした神のあわれみの数々を常に心にとめて自らを励まし、私たちの前途に横たわる残りの旅路を進まねばなりません。{SC 1979.6}

私たちは、来たるべき争闘においては新しい困難が起こることを避けることができませんが、将来を見るとともに過去をもふり返って「主は今に至るまでわれわれを助けられた」「あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」（申命記33：25）と言うことができます。神は、私たちの力に耐えられない試練にあわせることはありません。{SC 1980.1}

どんなことが起こっても、試練に相当する力が与えられることを信じて、与えられるままに私たちの仕事を始めましょう。{SC 1980.2}

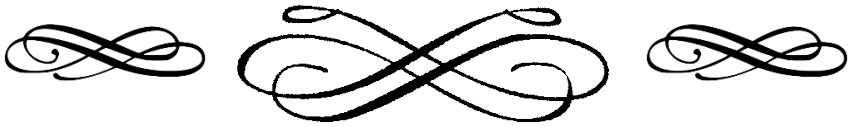
やがて、天の門が神の子らのために開かれ、栄光の王のみ口より「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」（マタイ25：34）という祝福の言葉がたえなる音楽のごとくに響いてきます。{SC 1980.3}

こうして、あがなわれた者は、イエスが彼らのため備えられた住居に迎えられるのです。そこで彼らが交わる人々は、地上の悪人、偽りを言う者、偶像を拝む者、汚れた者、不信仰な者ではなく、悪魔に打ち勝ち、神の恵みによって完全な品性を形づくった人々です。この地上で彼らを苦しめたあらゆる罪の傾向、あらゆる不

完全さは、みなキリストの血によって除かれ、太陽の輝きよりはるかに優れたキリストの栄光の美と輝きが、彼らに与えられるのです。そして、彼らを通して輝く人格の美、キリストの品性の完全さは、この世の外見の麗しさがとうてい及ぶものではありません。彼らは神の大いなる白き御座の前に罪なき者とせられ、天使たちの尊厳と特権にあずかるのです。 {SC 1980.4}

こうした栄えある嗣業を思うとき、人は「どんな代価を払って、その命を買いもどす」（マタイ16：26）ことができるでしょうか。人は、たとえ貧しくても、この世の与えることのできない富と尊厳とを自分のうちに持っているのです。罪よりあがなわれ、清められ、神へのご用にその尊い力のすべてをささげた魂はこの上もなく尊いものです。天ではただ1人の救われた者のためにも、神と天使は大きな喜びを感じます。そしてその喜びは、清い凱歌となって表現されるのです。 {SC 1980.5}

終わりを見越して



`